

南興野遺跡

第2次発掘調査報告書

山形県
山形県教育委員会

みなみ こう や
南 興 野 遺 跡
第 2 次 発 堀 調 査 報 告 書

昭和63年3月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本報告は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した酒田市南興野遺跡第2次調査の成果をまとめたものです。発掘調査では平安時代の建物跡・井戸跡をはじめとする集落に係る多数の遺構や遺物が確認され、古代出羽の国を考察する上で貴重な手がかりを得ることができました。

近年県内各地での開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。これらの開発から埋蔵文化財を保護するために、関係各機関と調査を計り、工事計画の変更等により現状保存するよう努めておりますが、開発が避けられないものについては、記録保存のための発掘調査を実施しております。文化遺産は、私達の祖先が自然環境と歴史の中で創造し、育んできたものであります。これらを理解し、愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめる事にもなると思われます。現代に生きる私達は、これらを長く後世に伝え残して行くことが重要な責務であります。生活文化を向上とする同じ立場から諸問題を調整し、今後とも埋蔵文化財保護のために努力を続けてまいります所存であります。

今後、本書が埋蔵文化財の理解を深めるとともに、学術・教育関係、その他広く一般の方々に利用され、文化財の保存・活用に資することになれば幸いです。末筆ながら調査にあたって多くの御協力を戴きました地元の方々をはじめ、酒田市、酒田市教育委員会、庄内教育事務所、庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区他関係各位に対し、心から厚く御礼を申し上げる次第です。

昭和63年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

例　　言

- 1 本書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて、昭和62年度に実施した
県管ほ場整備事業（北平田第1地区）に係る南興野遺跡（山形県遺跡地図2025）の第2
次緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和62年6月1日から同年9月18日までの延70日間実施した。
- 3 遺跡の所在地は、山形県酒田市大字南興野字南大坪1他である。
- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査）
佐藤 庄一（同上 埋蔵文化財係長）

野尻 侃（同上 主任技師）

現場主任 野尻 侃（同上 同上）

調査員 須賀井新人

事務局長 後藤 茂彌（山形県教育長文化課 課長）

事務局長補佐 土門 紹徳（同上 課長補佐）

事務局員 菅原 徳嘉・佐藤 大治・長谷部恵子・氏家 修一

高橋 春雄

- 5 発掘調査にあたっては、酒田市教育委員会、庄内教育事務所、山形県庄内支庁経済部
最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市北平田公民館、酒田市新青渡地
区他関係機関より多くの御指導、御協力を戴いた。ここに銘記して感謝申し上げる。
- 6 本書の作成は、野尻 侃・須賀井新人が担当し、I・II・III章を須賀井、IV・V章を
野尻が分担した。挿図・図版の作成は、大久保良重・篠原光子・阿部正子・井上みさ子・
栗原蛟子・澤田恵美子・塩野明子・鈴木邦子・須藤ゆり子・高崎くに子・升谷繁子・町
田厚子・吉田直子がこれを補佐した。編集は野尻 侃・阿部明彦が担当し、佐々木洋治
が統括した。
- 7 本書の作成にあたって国立歴史民俗博物館の平川 南助教授・永嶋正春助教授には漆
紙付着土器の解説など御指導と助言を賜った。また小野 忍氏（酒田市教育委員会）に
は遺跡全般に渡って御指導・助言を賜った。末尾ながら記して感謝申し上げる。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
3 立地と層序	5
III 検出遺構	
1 遺構の分布	13
2 掘立柱建物跡	13
3 井戸跡	16
4 土 壤	20
5 溝状遺構	24
6 旧河川跡	29
IV 出土遺物	
1 遺物の分布	30
2 遺構内出土遺物	31
3 包含層出土遺物	47
V ま と め	
遺構の変遷と時期	54

付表目次

表 1 調査工程表	表 6 溝状遺構出土遺物観察表 (2)
表 2 出土遺物点数表	表 7 溝状遺構出土遺物観察表 (3)
表 3 建物跡・井戸跡出土遺物観察表	表 8 旧河川跡出土遺物観察表
表 4 土壤出土遺物観察表	表 9 包含層出土遺物観察表 (1)
表 5 溝状遺構出土遺物観察表 (1)	表 10 包含層出土遺物観察表 (2)

挿図目次

第1図 遺跡位置と周辺の遺跡	4	第28図 包含層出土土器（1）	50
第2図 遺跡の層序	6	第29図 包含層出土土器（2）	51
第3図 遺跡全体図	7	第30図 包含層出土土器（3）	52
第4図 遺構分布図（1）	9	第31図 包含層出土遺物	53
第5図 遺構分布図（2）	11		
第6図 S B 1 建物跡	14		
第7図 S B 2 建物跡	15		
第8図 S E 64井戸跡	17		
第9図 S E 101井戸跡	18		
第11図 S K 23土壤	21		
第12図 S K 49土壤	21		
第13図 S K 63・98・99・100・105・188・198・199土壤	23		
第14図 S D 55・56溝状遺構	25		
第15図 S D 41・42溝状遺構とS D 21・22・24・59土層断面	28		
第16図 S G 58河川跡土層断面	29		
第17図 建物跡・井戸跡出土土器	31		
第18図 井戸跡出土木製品	33		
第19図 土壤出土遺物	35		
第20図 溝状遺構出土土器・硯	37		
第21図 S D 55溝状遺構出土土器（1）	40		
第22図 S D 55溝状遺構出土土器（2）	41		
第23図 S D 55溝状遺構出土土器（3）	42		
第24図 S D 55溝状遺構出土土器（4）	43		
第25図 S D 55・56溝状遺構出土土器・土製品	44		
第26図 溝状遺構出土木製品	46		
第27図 S G 58旧河川跡出土土器	47		

図版目次

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 図版1 遺跡遠景・近景 | 図版28 包含層出土土器（1） |
| 図版2 調査風景 | 図版29 包含層出土土器（2） |
| 図版3 遺跡の層序 第1次調査 | 図版30 包含層出土遺物 |
| 図版4 S B1・2 建物跡検出状況 | |
| 図版5 S E64井戸跡検出状況 | |
| 図版6 S E64井戸跡 | |
| 図版7 S E101井戸跡 | |
| 図版8 S E104井戸跡 | |
| 図版9 S K23・49・62・100土壤 | |
| 図版10 S D55・56溝状遺構 | |
| 図版11 S D55・56遺物出土状況 | |
| 図版12 S D21・24・41・42溝状遺構 | |
| 図版13 S G58旧河川跡検出状況 | |
| 図版14 S G58土層断面・出土遺物 | |
| 図版15 建物跡・井戸跡出土土器・木製品 | |
| 図版16 井戸跡出土斎串（1） | |
| 図版17 井戸跡出土斎串（2） | |
| 図版18 土壌内出土遺物 | |
| 図版19 溝状遺構出土土器・石製品 | |
| 図版20 溝状遺構出土土器（1） | |
| 図版21 溝状遺構出土土器（2） | |
| 図版22 溝状遺構出土土器（3） | |
| 図版23 溝状遺構出土土器（4） | |
| 図版24 溝状遺構出土土器（5） | |
| 図版25 溝状遺構出土土器（6） | |
| 図版26 溝状遺構出土土器・木製品 | |
| 図版27 溝状遺構出土木製品・旧河川跡出土土器 | |

凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S B……建物跡 S E……井戸跡 S K……土壤 S D……溝状遺構

S G……河川跡 E B……柱穴 E P……小穴 S X……性格不明遺構

2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま踏襲し、記述した。

3 遺物に付した番号は、RP(土器・土製品)、RQ(石製品)、RW(木製品)、RM(金属製品)であり、遺構内での検出順に従って番号を付した。

4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺構分布図・同実測図中の方位は磁北を示している。なおグリッドの南北軸は、磁北より2°00'西に傾いている。また建物跡の主軸方向は、南北棟を平行で、東西棟を梁行で測定した。
- (2) 遺構実測図では、1/40～1/160他の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (3) 遺物実測図・拓影図・図版は原則的に1/3で採録し、各にスケールを付した。
- (4) 土器実測図・拓影図の断面では、白ヌキが土師器、●印が赤焼土器、黒ベタが須恵器を表している。また土師器で内黒のものは内面に網点を入れた。
- (5) 遺物観察表中の計測値欄で、()内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位で「F」は遺構覆土内出土を示し、ローマ数字「I～III」は遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。さらに井戸跡における「F②」の○は井戸跡枠組内部からの出土を示し、数字はその層序を表すものである。
- (6) 遺物写真は原則的に1/3で採録したが、小形の破片資料は1/2、大型の井戸枠組等は1/8としている。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通のものとした。

I 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

最上川右岸から日向川左岸地域では、昭和40年代後半から県営ほ場整備事業が計画、実施されており、昭和48年県教育委員会に文化財を担当する文化課が設置されると同時に、開発事業との調整を行ってきた。

昭和61年度には、南興野遺跡の西半部に県営ほ場整備事業が実施されたため、事業計画の南東部、南興野地区を中心とした緊急発掘調査が同年6月2日から9月19日までの延70日間行われた。その結果、建物跡・板材列・井戸跡等多数の遺構や、土器・木製品等の遺物が発見されている。

昭和62年度には、引き続き遺跡の東半部を含む地域で同事業が開始されることになり、昭和61年度に県農林水産部農地計画課より遺跡詳細分布調査の依頼が、県教育委員会に出された。これを受けて昭和61年10月に本遺跡東半部の範囲・性格・内容を確認するための分布調査を実施した結果、事業計画の南西部南興野地区を囲むように遺構・遺物の分布状況が確かめられた。この調査結果に基づき、山形県教育委員会では文化財保護の立場から県農林水産部、酒田市教育委員会等関係諸機関との協議を重ねた結果、昭和62年度に昨年度調査に引き続く第2次の緊急発掘調査を実施し、記録による保存を図ることとなった。

2 調査の経過

調査は昭和62年6月1日から同年9月18日までの延70日間に渡り実施した。

まず初めに、遺跡全域を包み込むように5m四方を1単位とするグリッドを設定し、東西線をX軸、南北線をY軸と定めた。Y軸は磁北に対しN-2°-Wの傾きを測る。グリッドの座標には5m単位に通し番号を付け、両者の番号によりグリッドの位置関係を標記した。調査では事業計画の道路・排水路部分から開始し、計4本の計画道路・排水路について線掘りによるトレンチ調査を実施した。その後、遺構・遺物の遺存状態が良好な地域を探るために、1×3mのトレンチを10m毎に約150ヵ所設け掘り進めた。その結果、市道新青渡線に沿って3ヵ所に遺構・遺物の集中区域が確認され、北よりA・B・C区と呼称した。これら精査区は重機械を用いて表土を除去し、その後順次手掘りによる面精査に移行し、遺構・遺物検出面及びその広がりの把握を行った。検出遺構は平面プラン確認後、覆土を半載しての土層観察、出土遺物は遺構番号毎やグリッド単位毎に取り上げる等、写真撮影・図面・レベリングの記録作業を経て調査を終了した。調査終了日の9月18日には文化財保護の啓蒙活動として現地説明会を実施した。

表1 調査工程表

月 日	6月				7月				8月				9月			
	1 日	8 日	15 日	22 日	30 日	8 日	13 日	20 日	28 日	3 日	17 日	24 日	1 日	7 日	16 日	
	5 日	12 日	19 日	26 日	3 日	10 日	17 日	23 日	31 日	7 日	21 日	28 日	4 日	11 日	18 日	
調査内容																
実調査日数																
準備	資材準備															
粗探り	発掘区設定															
面精査	手掘り															
遺構精査	重機械使用															
遺構精査	面整理															
	遺構検出															
	Eトレンチ															
	Fトレンチ															
	Hトレンチ															
	Jトレンチ															
	Kトレンチ															
測図作業	Lトレンチ															
	A区															
	B区															
写真	C区															
	水糸張り面測定															
備考	全体写真															
	細部写真															

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

庄内平野は面積約585km²、南北に長く北端では幅が狭まって鳥海火山の噴出物の下に没する。東縁はほぼ直線状の山麓線となっており、断層線に沿うものと考えられる。南縁には月山の泥流に接する部分と、大山付近の入江状の山麓線を示す部分がある。

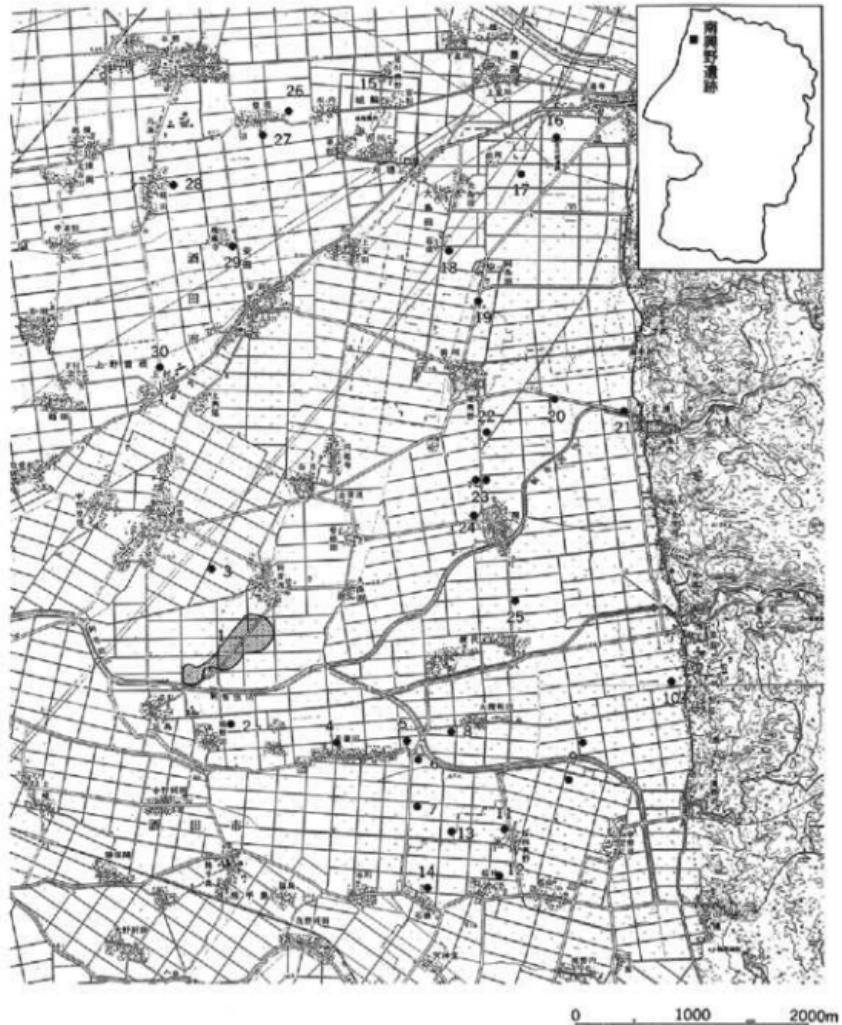
最上川は上流の盆地群において砂礫の大部分を堆積させるため、庄内平野の出口には狭く不明瞭な扇状地性の氾濫原がみられるだけであるが、南から庄内平野へ流入する赤川は鶴岡市付近に扇状地を形成し、平野北部においても月光川・日向川等が小扇状地を形成している。しかし、平野の主要部分は庄内三角州地帯であり、海拔高度5~15mのきわめて低平な平野となっている。

南興野遺跡は酒田市大字新青渡字南大坪に所在する。酒田市街地より東方約4km、新青渡部落の南方水田中に在り、標高は約4kmを測る。飽海平野と呼称される最上川以北の沖積平野部の中で、酒田北部三角州の縁辺部に立地する。しかし、南方100mには新井田川が西流しており、新井田川右岸の自然堤防上に立地するものと考えられる。また付近には旧流路の痕跡を残す地域もあり、湿地性の高い地区である。

2 歴史的環境

庄内地方で確認された古代の遺跡は約300カ所に及ぶ。これらの遺跡の内、日向川から最上川右岸の間の平野部には約60カ所の遺跡が点在している。第1図はその中に存在する遺跡を地図上にプロットしたものであるが、遺跡の大半は平野部の河川低地上に立地している。この地域は日向川や最上川等の大小河川にもたらされた沖積地で、古代から現代に至るまでこの肥沃な土地を求めて開発が重ねられ、日本有数の穀倉地帯となっている。

本遺跡北方4.5kmに所在する国指定史跡「城輪柵跡」は、一辺約720mのほぼ正方形に木柵が巡らされており、東西南方は二重、北方は三重に並列している。平安時代の出羽國府跡と擬定される「城輪柵跡」より南側には、旧建築部材が埋設した築地業を検出した堂の前遺跡、更に南方の河川段丘上に立地し國府移転先「高敵の地」と推測される八森遺跡、南東付近には、猿投窯産綠釉陶器や灰釉陶器を出土した沼田遺跡、人面墨描土器甕内に人形木製品を入れ戻いの場が復元された俵田遺跡、本遺跡周辺では東方約4kmに、100m以上に及ぶ板材列や300点以上の墨書き土器・漆紙文書を出土した生石2遺跡、丸木舟を利用した櫓を検出した生石4遺跡などがある。また今年度に同様の発掘調査が行われた手藏田10・11遺跡、熊野田遺跡、早稻田遺跡等多くの遺跡が隣接している。



第1図 遺跡位置と周辺と遺跡

1 南阿野遺跡	2 維野田遺跡	3 新青渡遺跡	4 手藏田2遺跡	5 手藏田12遺跡
6 手藏田10・11遺跡	7 手藏田6・7遺跡	8 大槻新田遺跡	9 生石2遺跡	10 生石千遺跡
11 桜林興野遺跡	12 桜林遺跡	13 西田遺跡	14 早橋田遺跡	15 史跡城輪御跡
16 史跡堂の前遺跡	17 後田遺跡	18 蓼田遺跡	19 廣田遺跡	20 上ノ田遺跡
21 北境遺跡	22 境阿野遺跡	23 北田遺跡	24 間B遺跡	25 高岡弥田遺跡
26 豊原遺跡	27 豊原B遺跡	28 庭田遺跡	29 安田遺跡	30 上曾禪遺跡

3 立地と層序

庄内平野東方の出羽丘陵に源をもつ新井田川は、庄内平野に入ると南西に蛇行しながら本遺跡の東方800mで、同じように出羽丘陵から流れ出る平田川と合流し、酒田市街を通り日本海へ注ぐ。本遺跡は新青渡地区の南方に位置し、東西方向に延びる新井田川・旧平田川起源の自然堤防上に立地していると考えられる。現集落も自然的な立地条件であり、新青渡地区から南興野地区に通じる市道も自然堤防を利用した、周辺よりも比較的高い位置を呈している。遺跡を中心として幾分東西に緩やかな傾斜が認められる。調査の所見では遺跡全城での地盤が高く、シルト・粘土を基調としたやや安定な状況と認識される。しかし、東に向かって徐々に基盤層が下がり、耕土下の強粘質土もしだいに厚く、グライ化も強くなる傾向がうかがえる。一方、南方にかけては泥炭層が広範に分布し、旧来からの低湿地であった事が理解される。これは直ぐ南側に新井田川が西流していることから、旧氾濫原を想定でき、本遺跡が酒田三角州の東辺に立地しており、三角州の縁辺が低い自然堤防を形成し旧氾濫原との境界を呈していたと考えられる。

本遺跡の基本的層序は計画排水路Lトレンチの48~50-78グリッド東西線の北面線(第2図上段)、およびA区61~64-38グリッド東西線の南面壁(同中段・下段)との2カ所で観察した。両方共に基本的には同様な層序を示しており、第III層上面が遺構検出面にあたる。遺跡のほぼ中央部にあたるLトレンチでの層堆積は、流动の少ない比較的安定した自然堆積の様相を呈しているが、これより北に進むにつれ耕土下の粘土質の度合いがしだいに強くなり、グライ化が激しくなる。現況の花畠として利用されているA区南面壁では強粘質土のブロックが耕土下に厚く堆積し、この様相を呈する。以下に第2図に示した層序の観察を記述する。

第I層 暗褐色微砂質土

水田および畑地の耕作土で、粘性がやや認められる。

Lトレンチ近辺では20~30cm、A区周辺では15~20cmの厚さでほぼ均一に堆積する。

第II層 暗オリーブ褐色シルト

炭化物粒子や土器片等を含む遺物包含層で、Lトレンチでは本層下部に黒褐色の粘質土をはさむ。10~30cmの厚さで堆積する。

または

暗褐色粘質シルト

酸化性に富んで黄橙味を帯びた部分と、青灰色粘質土部分が存在する。無遺物層で、本層直上面が遺構検出面にあたる。

第III層 青灰色粘質シルト

酸化性に富んで黄橙味を帯びた部分と、青灰色粘質土部分が存在する。無遺物層で、本層直上面が遺構検出面にあたる。

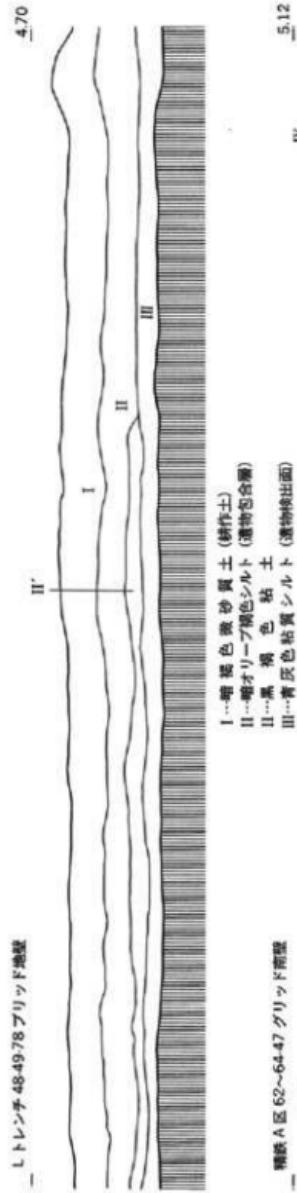
または

浅黄褐色粘質シルト

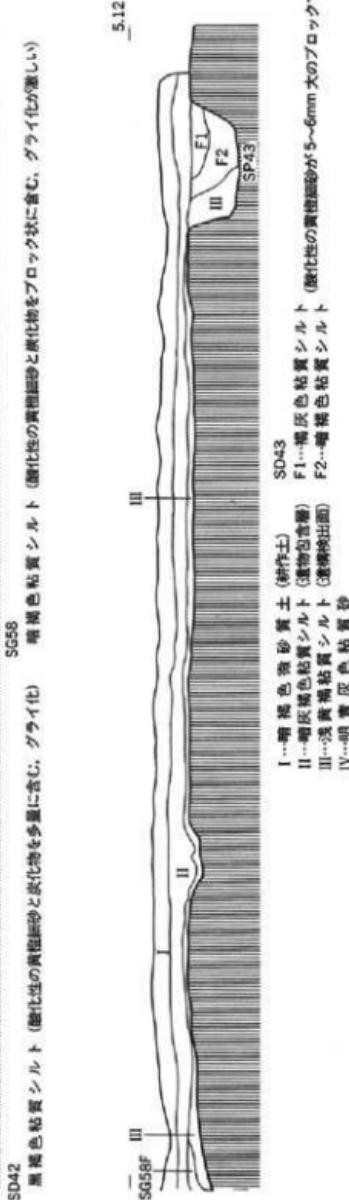
シルト質の細砂で粘性がやや強く、III層のグライ化していないものにあたる。

第IV層 明青灰色粘質砂

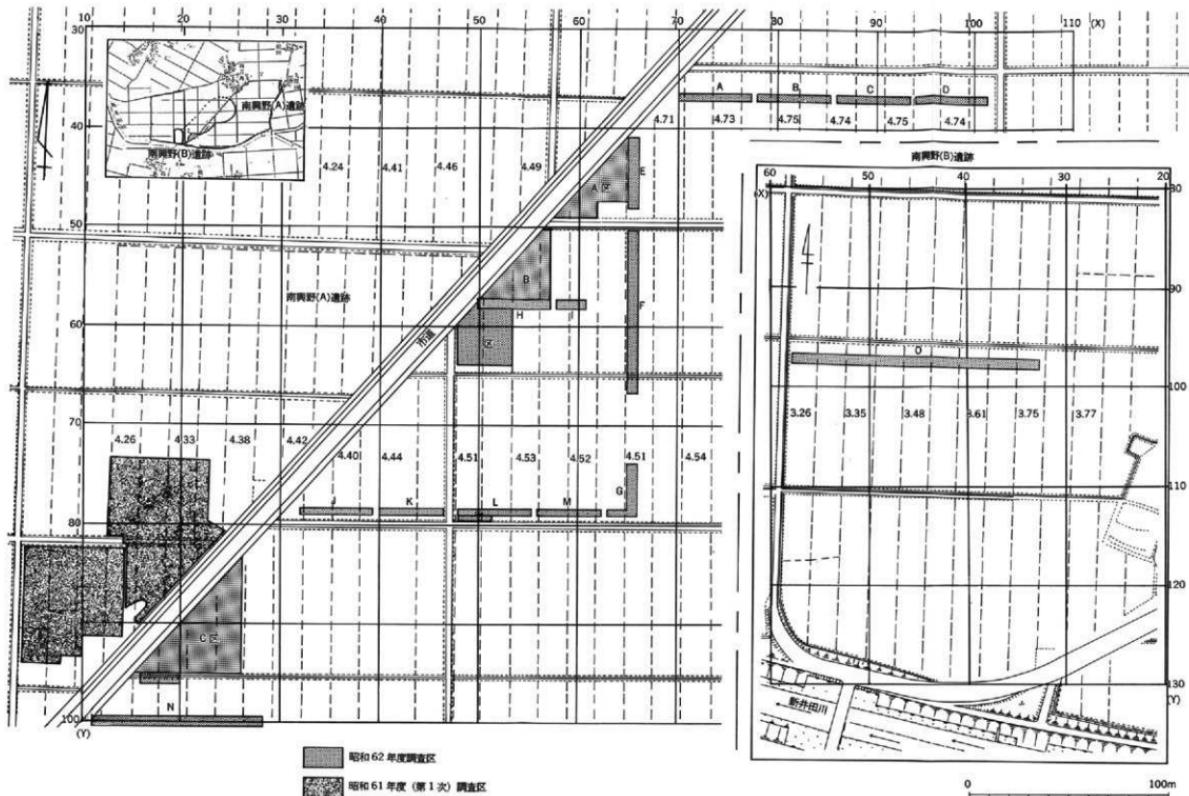
トレンチ484978 ブリッド地盤



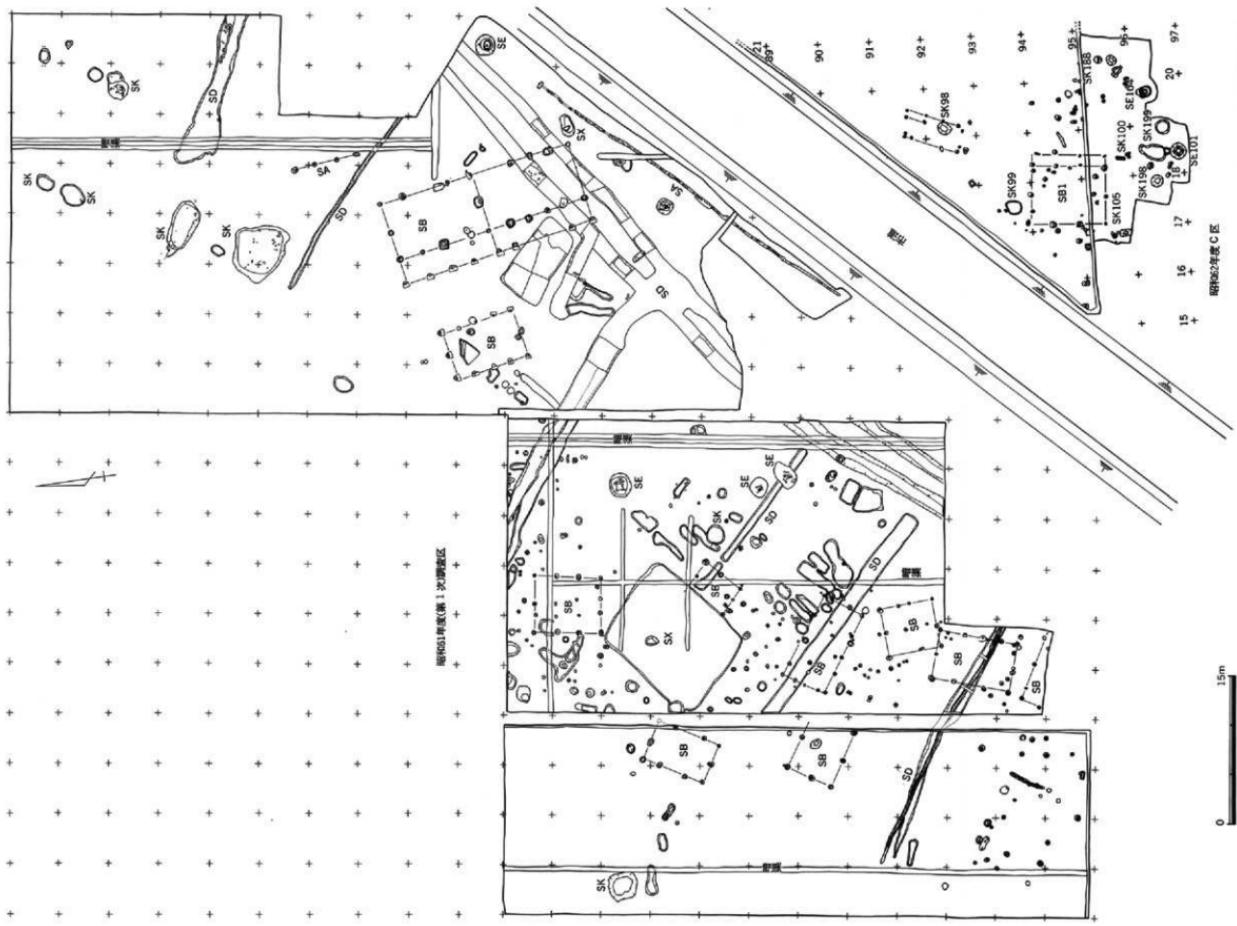
— 6 —



第2図 遺跡の層序



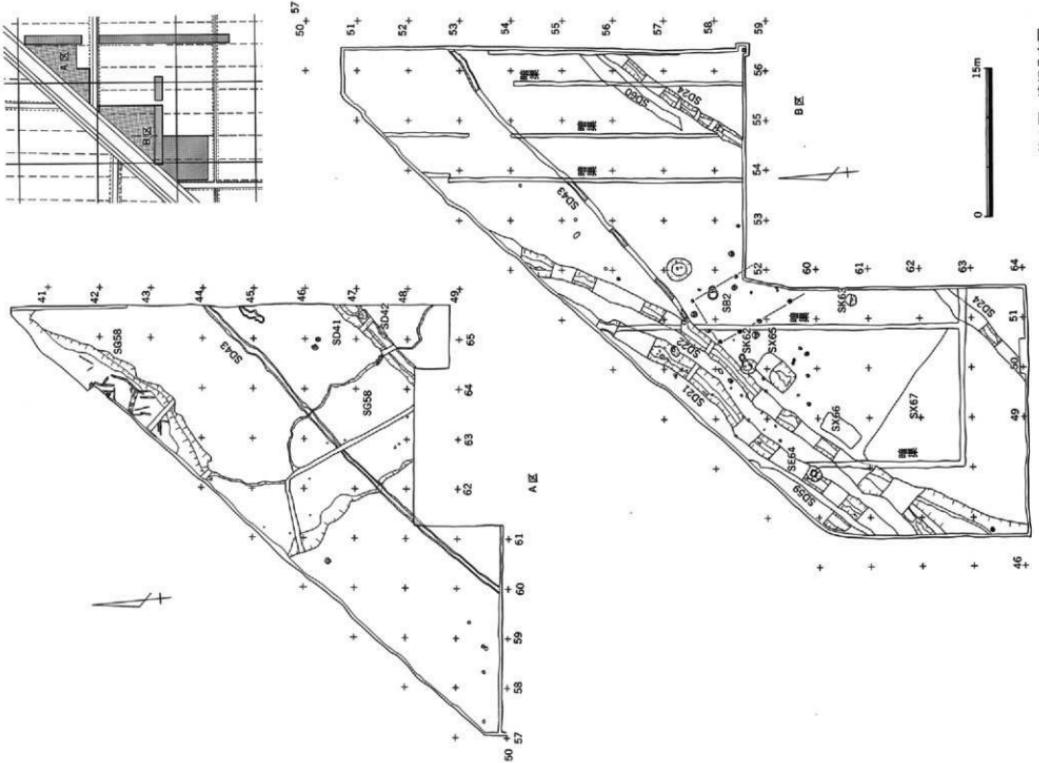
第3図 遺跡全体図



第4図 遺漏分布図 (1)

第5図 連桿分布図

1



III 検出遺構

1 遺構の分布（第4図・5図）

南興野遺跡の遺構・遺物が分布する範囲は、昨年度の第1次調査や同年秋の今年度調査区域詳細分布調査、さらに調査当初の坪掘り等の内容を加味すると南北400m、東西300mの範囲におよぶ。この内、市道をはさんだ西方半部は第1次調査で明らかにされ、その地形的な分布傾向は、新青渡地区から南興野地区に通じる市道沿いに遺構が密であるという結果を得ている。この分布状況の要因として、市道沿いが周辺地形より一段高い現状にあり、庄内北部河間低地の自然堤防上に立地したものと考えられる。東半部を発掘した今次調査でもこの傾向が顕著にうかがえ、地形的要因に立脚した遺構分布状況を呈している。市道（自然堤防上）より南東方向へ遠ざかるにつれ、第III層である地山（遺構検出面）が耕土下かなりの深さで確認され、また強粘質土もしだいに厚く、やがて泥炭層へとつながる。のことから考えても、基盤層の低い東方への遺構の広がりはないものと思われる。

今回の発掘調査では延調査面積6,810m²にのぼり、A区(1,080m²)、B区(1,610m²)、C区(1,570m²)の3カ所の精査区と、計画農道および排水路部分のトレーニング調査(2,550m²)を実施した。この中で検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、井戸跡3基、土壙12基、溝状遺構15条、新井田川の旧支流の一部と考えられる河川跡1条の他、性格不明遺構3基と建物跡として組み合わせができなかった柱穴やピット等、登録された遺構は213を数える。これらの遺構は、検出状況から大きく2つの特徴を有する。ひとつは検出された溝状遺構のほとんどが北東—南西方向に主軸をもつ溝跡で、自然堤防上の現況市道に対して平行に走ることである。このことは、旧地形という立地環境に合わせて掘り込まれたことを示している。もうひとつは磁北ないし真北の方向を示す南北の身舎を構成する建物跡(S B 1)と、自然堤防または溝状遺構に対して直角に90°の傾きを呈する建物跡(S E 2)とがあり、それらに付随させる形で井戸跡や土壙が配置され、ひとつの集落構成単位としてとらえることができる。以下に各遺構毎に記述する。

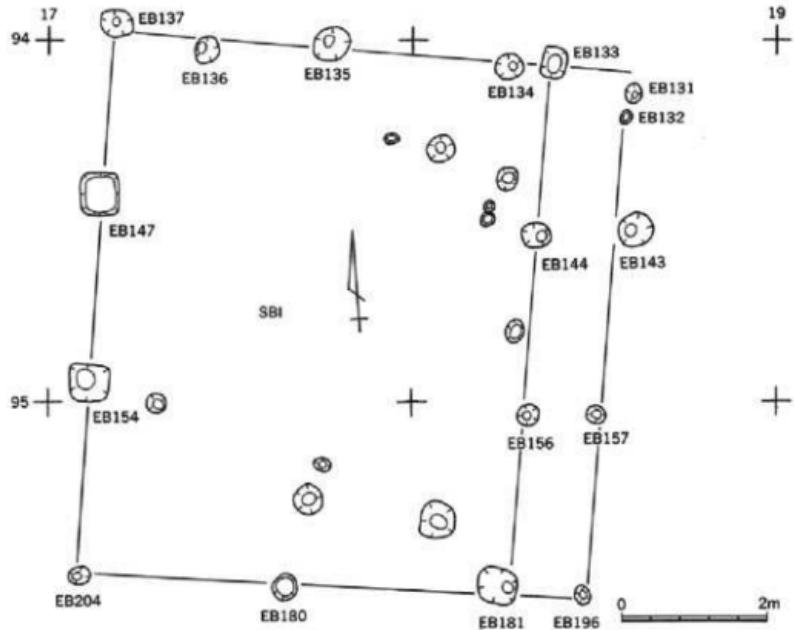
2 掘立柱建物跡

調査で確認された掘立柱建物跡は2棟である。いづれも柱配列・柱間距離が各面共に個々別々な配置をしているが、各々が建物跡の構成になる配置となったもので取り上げた。中には柱基部、すなわち柱根として実物を残すものもあるが、他は朽ちて土化した柱穴跡で、それらを線上に組み合わせて建物跡として認めるものである。遺構番号を付した順に確認できた内容を記述する。

S B 1 建物跡 (第6図, 図版4)

精査C区南西部17・18-93-95グリッドIII層上面で確認された梁行2間, 衍行3間に東面廂または縁東を持つ南北棟である。身舎の梁行長は6m, 衍行長西面7.5m, 東面7.2mを測る。柱間距離は、身舎北面梁行E B137, 135, 133柱穴で西から3m(10尺)等間に1m(約3尺)の廂部となる。南面梁行E B204, 180, 181, 196柱穴で北面と同様の柱間距離を測る。衍行での柱間距離は、身舎西面衍行E B137, 147, 154, 204柱穴で北から2.4m(8尺)2.4m, 2.7m(9尺), 東面衍行E B133, 144, 156, 181柱穴で2.4m等間である。東面衍行部に付随する廂部の柱穴もほぼ衍行柱穴と同様の柱配列を示し、柱間は北から1.8m(6尺), 2.5m(約8尺), 2.4mを測る。東面の柱間は規則的な配置を成しているのに対し、西面では衍行長が約30cm長く、廂部のそれは50cm程短い、これはE B137とE B133、それにE B131柱穴が直角にならない配列であることから、いづれかに曲り柱(躊柱)を使用していたとの推測も可能なため建物跡と認定した。南北主軸方向は、磁北を基準としてN-8°-Eである。

柱穴掘り方は直径30~50cm、検出面からの深さ20~35cmの円形ないしは隅丸方形を呈する。柱アタリ部の埋土暗灰褐色粘質シルトを基調としている。E B147柱穴からのみ土器片が出土しており、内2点は墨書銘のある須恵器・坏片(第17図1・2)である。

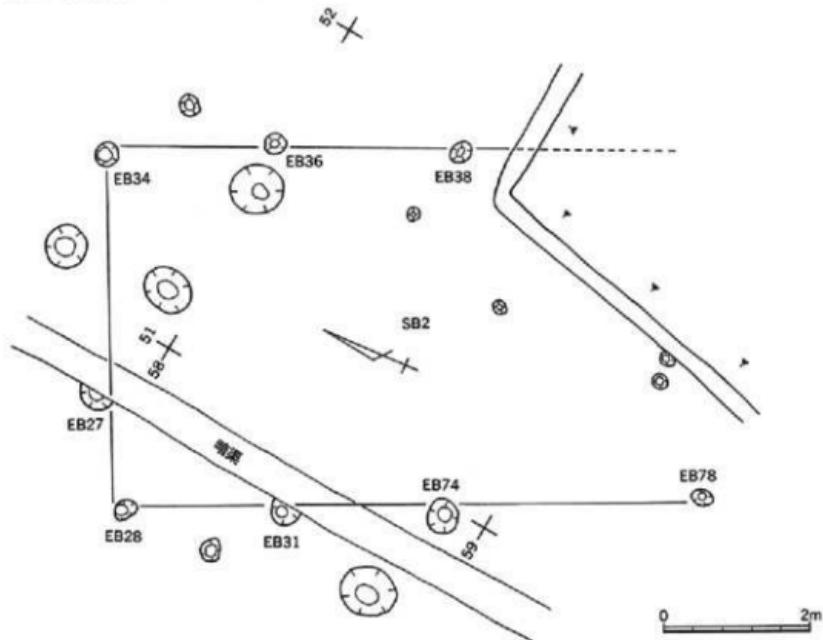


第6図 S B 1 建物跡

S B 2 建物跡 (第7図、図版4)

精査B区中央部50・51-57~59グリッドIII層上面で確認された梁行2間、桁行3間以上の南北棟を構成する建物跡である。身舎の梁行長4.8m、桁行長8m以上を測る。桁間は3間まで確認できたがそれ以上は未掘部分となることで不明であるが、2間×3間で構成する建物跡と考えられる。柱間距離は身舎北面梁行EB28・27・34柱穴で西から1.5m(5尺)3.3m(11尺)を測る。南面梁行部は未掘なため不明であるが、梁行長は北面同様4.8m(16尺)と推定できる。西面桁行E B28・31・74・78柱穴で北より2.1m(7尺)、2.2m(約7尺)、3.6m(12尺)、東面桁行の検出部分E B34・36・38柱穴で2.4m(8尺)、2.6m(約9尺)を測る。身舎各面の柱間が不規則な距離間隔であるが、柱穴掘り方の覆土状態が同様な柱穴を組み合わせた結果、建物跡として構成されるものと考えたものである。南北主軸方向は、磁北を基準としてN-24°-Wを測る。

柱穴掘り方は、直径15~25cm、検出面からの深さ18~25cmの円形または橢円形を呈する。柱は抜き取られたり朽ちて残存しているものはないが、柱のアタリ部などから径10cm前後の円柱を利用した可能性がある。本建物跡柱穴の内5カ所から土器片が出土している。須恵器・赤焼土器の壊・甕片の他黒色土器も出土しているが、図示できるものE B78柱穴出土の墨書痕が認められる須恵器・壊底部片(第17図4)のみで、他は細片であった。



第7図 S B 2 建物跡

3 井戸跡

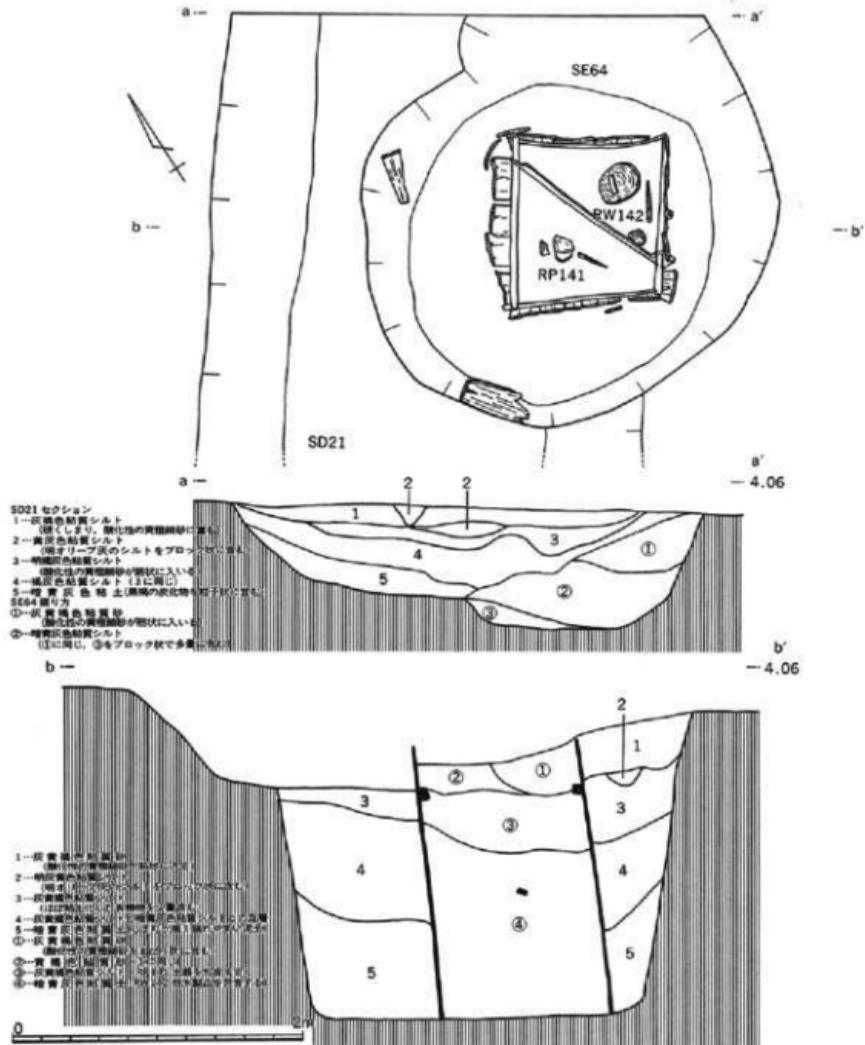
今回の調査で検出された井戸跡は3基を数える。精査B区で1基、精査C区で2基である。前述したように、3基の井戸跡とも建物跡に付随するような位置構成を示す。B区の井戸跡は横棧に組まれた井側の周囲に縦板を打ち込んでる（SE64）である。C区の井戸跡は組み込まれた下方3段の井桁が残存し、その上部は取りはずされている（SE101）と、方形の井桁跡の内部に曲物による井戸眼を設定している（SE104）がある。以下に各井戸跡毎に記述する。

S E64井戸跡（第8図、図版5・6）

精査B区西側中央付近、47—59・60グリッドIII層上面でその掘り方の掘り込みが始まる井戸跡である。本井戸跡はその掘り方西方大半をSD21溝状遺構と重複しているため、西側の掘り方確認面は、SD21床面部上面に現れるという変則的な検出状況を呈している。掘り方は東西1.5m、南北1.3mのやや円形を呈しているが、北東部に膨らみを持ち、掘り方はさらに広がる状況を呈している。掘り込まれた深さは第III層掘り方上面より98cm、SD21溝状遺構床面部上面より80cmを測る。掘り方は4層に分かれ、灰黄褐色粘質砂～シルトと暗青灰色粘質土を交互に埋め込みが見られる。掘り方の中央部には井戸枠組みが方形に組み込まれている。井側は幅8～15cm、長さ88～96cm、厚さ1～2cmの板が縦位に打ち込まれ、先端部の片面を片刃状に削っているものや、尖らしている板材もある。これらの井側の上部内側、縦板上部先端より15cmの箇所に横棧が組み合わされている。これら横組棧は長さ54～57cm、幅1～3cm、厚さ4～5cmの4本の角材が使われ、内寸55cmの不整方形を型どり、一辺に5～6枚の縦板が添う構造となっている。東側と西側の横棧は両端部が凹型に削りとられているのに対し、南北側のそれを凸型に加工して四隅をつなぎ合わせている。

本井戸跡がSD21溝状遺構と重複しており営みの時期に違いのあることは前にも記述したが、井戸跡掘り方東北部にかかる断面を観察した結果、井戸跡掘り方上にSD21の切り合いか確認された。したがって本井戸跡は、同溝状遺構より時間的に古く、井戸が廃棄され埋められた跡に溝を築いたものと考えられる。

本井戸跡枠組内各層より須恵器・赤焼土器片が出土している。RP141は覆土第1層（図中番号①・②）から出土した墨書き器である。土器片の他に、覆土第2・3層において7本の斎串が出土しており、呪術的意味合いの強さがうかがえる。RW142は径18cm程度の円盤状を呈し、内側に段を有する蓋型蓋状の木製加工品である。他に本井戸枠組材の一部と考えられる長さ76cmに及ぶ^{ハサ}の差し込み穴を持つ板材が、投げ捨てられた状態のもとで出土した。本井戸跡は井側内部や掘り方内からの出土土器により、平安時代11世紀初頭から中葉に推定される。



第8図 SE64井戸跡

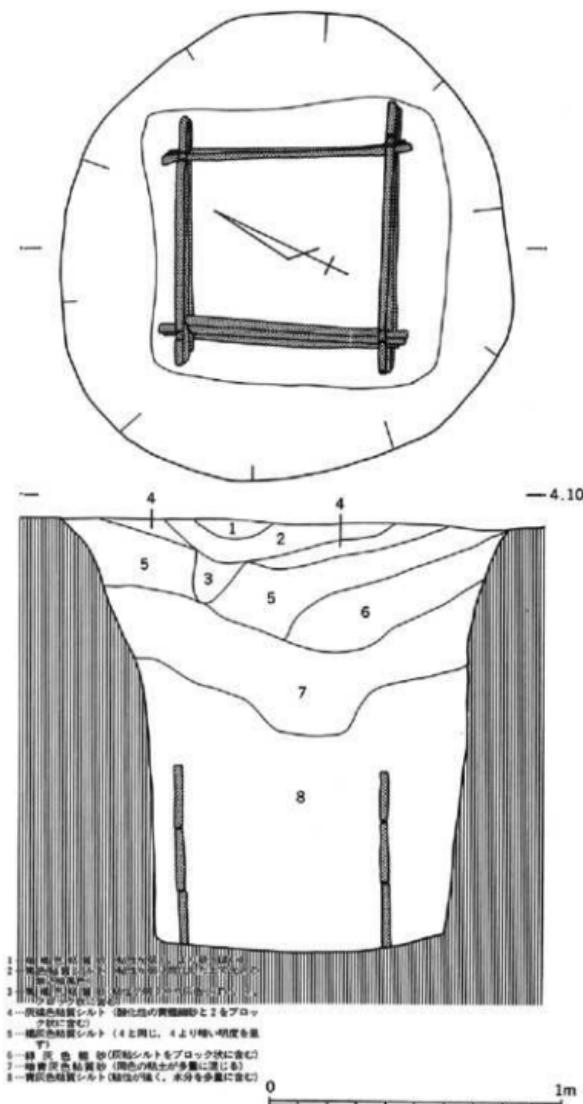
S E 101井戸跡 (第9図、図版7)

精査C区南西部端18-96・97グリッドIII層上面、S B 1 建物跡の南約8mの所で確認された井戸跡である。掘り方は東西1.65m、南北1.60mの不整円形をついしている。掘り込まれた深さは掘り方上面より147cmを測る。掘り方は8層に分かれ、F₃の断面がU字型の窪みを呈することから、この時期での掘り込みの行われたことが観察できる。また、堆積層上部の検出面を覆うF₁～F₅が炭化物を含む粘性の弱い黒褐色粘質砂～シルトを呈し、本

來の井戸跡内部の層序列と近似している。

掘り方の中央には、遺存状態の良好な井戸枠組（井側）を方形（井桁）に組み込んでいる。井側は幅8~24cm、長さ88~93cm、厚さ2.5~4cmの柾目の板材を井桁（校倉式）に組み入れ、下段から3段に垂直な積み上げを行っている。最下段東側および西側の井側を設置した後南北側のそれを重ね上げ、2段目以降においてもこの繰り返しで積み重ねられている。設置面に当たる東西側最下段井側の下面が平らに保たれている。他は、すべての井側の両端上下部に凹状の切り込みが施されている。遺存する下方3段組の井桁は高さ54cmを図り、その最上部は掘り方上面より85cmの深さにある。これより上部の井戸枠組は、井戸廃棄の際取り除かれたものと考えられる。

本井戸跡からは斎串等多数の木製品が出土しており、斎串9本、箸2本、皿状木製品1点を数える。出土した土器はどれも細片であり、図示できるものはなかったが、時期は平安時代10世紀後半に推定される。



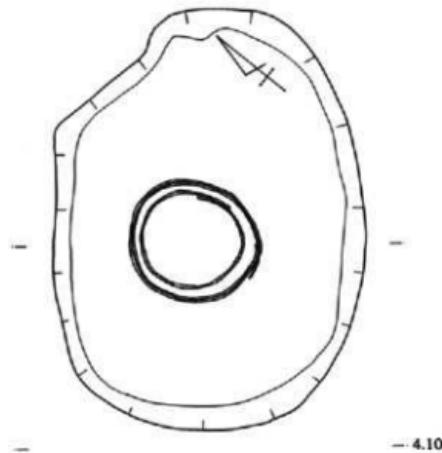
第9図 SE 101井戸跡

S E 104井戸跡 (第10図、図版8)

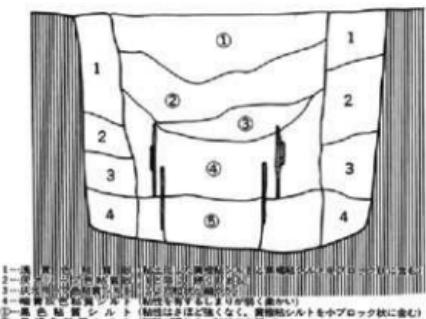
精査C区南縁中央19-96グリッドIII層上面、S E 101井戸跡のすぐ東側で確認された井戸跡である。掘り方は東西1.4m、南北1.1mの北隅を欠いた隅丸方形を呈している。その中央部は約70cm方形に黒色粘質シルトで覆われ、明確な井戸枠組内覆土の様相を呈しており、一見掘り方埋土とは区別できる。掘り込まれた深さは最深部で82cmを測る。層序は井戸枠内が5層、掘り方内で4層に分かれ、粘性の強い灰オリーブ色シルトと黒褐色シルトブロックの混入する浅黄色粘質砂を埋め込んでいる。

掘り方の中央には遺存状態の良好な井戸眼と呼ばれる曲物を二重に設定し、据え置く深さに差異を設けて組み込んでいる。外側の曲物は幅24cm、厚さ6~7mmの杼目板の内面に約1cm間隔で鋸引をいれ、板両端は内側20cm、外側で22cm程を重ね合わせて丸めている。その重ね目は幅9~10mmの樹皮で縫い合わされ、径約42cmを測り円筒状に組み上げている。さらにその外側には、6cm幅の板を同様な手法により曲げ込み、曲物を取り巻く形態を呈している。これは外側井戸眼を補強するたがの役割を持つと考えられる。内側の曲物は径約36cm、高さ20cm、厚さ6~7mmの杼目の板を使用し、両端は内側14cm、外側15cmを重ね組みしている。外側曲物は掘り方上面より62cm下に、内側曲物は73cm下に設置されており、その上部が外側曲物に約11cm入り込む形となっている。

断面の観察では掘り方と井戸枠内部の埋土とに明瞭な境界線を描くことから、以前は井側が組まれていたことを意味しているが、廃棄の際取り扱われたものと考えられる。F_④F_⑤からはこれら組材と思われる板材が投げ込まれた状態で検出された。本井戸跡の時期は平安時代10世紀後半と考えられる。



- 4.10



第10図 S E 104井戸跡

4 土 壤

調査で土壌と確認され、遺構登録された数は12基を数える。これらは平面形から円形・不整円形・方形・不整方形・隅丸方形・長方形・楕円形など形状を決められるものや、前述の形に決めることが難しい形状を呈するものがある。また断面形においてもその形状は様々で、台形・樋形・船底形などを呈し底面は一定しない。ここでは覆土内部に遺物を包含する土壙を中心に記述し、後にいくつかの形態に分類した土壙を番号順に述べる。

S K23土壙（第11図、図版9）

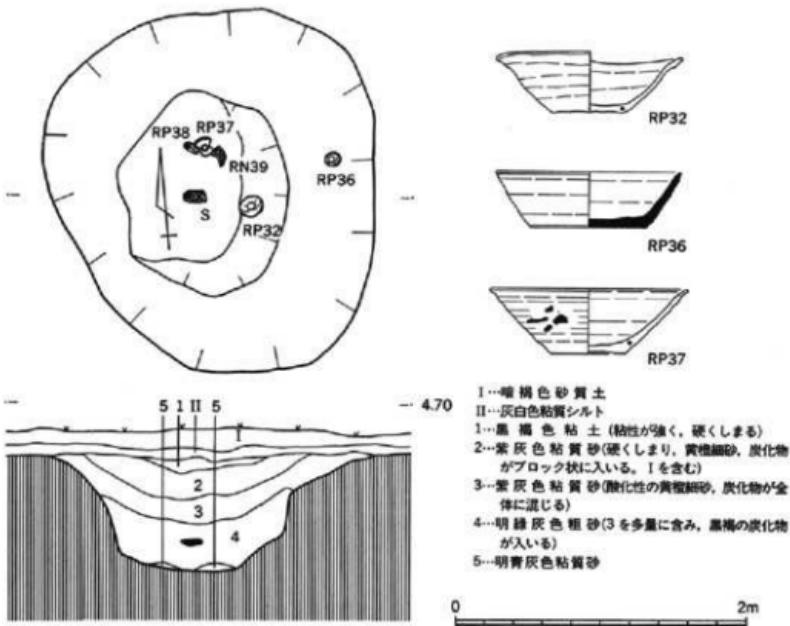
精査B区ほぼ中央、SB2建物跡北面梁行の東北方向延長線上3m、51・52-57グリッドII層下部よりその掘り込みが始まる土壙である。規模は東西2.2m、南北2.5mで不整の隅丸方形を呈し、最深部は掘り込み面より84cmである。覆土は5層に分かれ、炭化物を多く含む黒褐色粘質土を基調としており、自然堆積の様相を呈している。断面形は船底形を呈し、東側がやや大きく広がり段がつく。底面は東側にやや下降しているが、起伏がなくほぼ平坦である。壁面は底面より急激に立ち上がり、掘り込み部へ向かうにつれ緩やかな傾向を示す。

本土壙内からの出土遺物は土器が圧倒的に多いが、土製品、自然遺物等も出土している。土器は須恵器・内黒土器・赤焼土器片であるが、下層に掘り進めると完形またはそれに近い土器が出土してきている。F₄層からは網のおもりに使われる土鍤と、ほぼ形を整えたままのひょうたんが出土している。層序内での出土状況はF₂層中からの出土量が多いものの、いずれも破片で図示できるものはない。時期は出土土器により10世紀後半と考えられる。

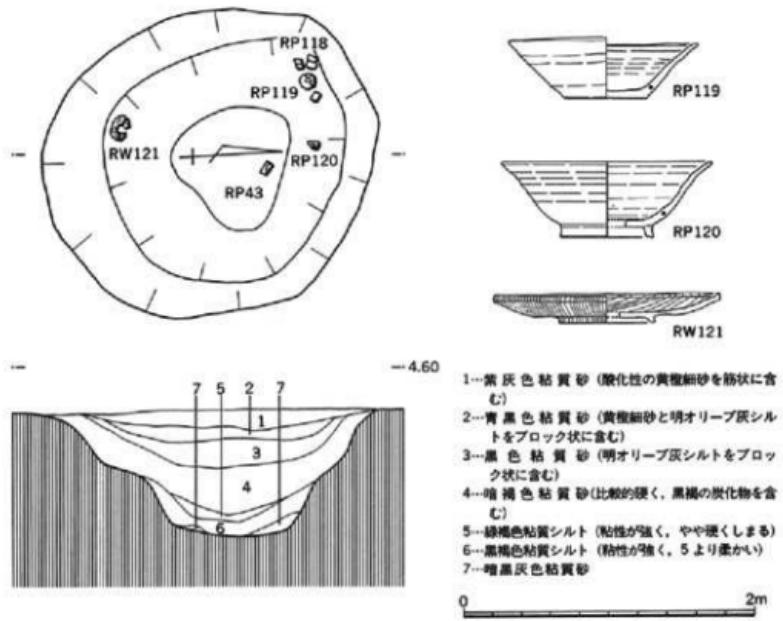
S K49土壙（第12図、図版9）

計画農道調査区Fトレンチ北側西壁沿い、64・65-53グリッドIII層上面で検出された土壙である。平面形は不整円形を呈し、断面形は船底形となる。本土壙の規模は、東西2.1m、南北2.3m、掘り込み面からの深さ87cmを測る。周壁は急激に掘り込まれ中位で段がつくが、南側がやや緩やかで大きく広がる。底面は北下がりのほぼ平坦である。覆土は7層に分かれ、黒褐色粘質土を基調とした自然堆積の層序を示しているが、F₄層の緑黒色粘質シルトがレンズ状に堆積していることから、近い時期での連続利用された土壙と考えられる。

覆土各層内からの出土遺物は土器片、木製品、石製品などである。土器は須恵器・赤焼土器の壺・甌片、内黒土師器の壺片などであるが完形土器はない。RW121木製品は漆器の皿で、塙周壁密着で検出された。底部と口縁部の一部を欠き漆もほとんど剥げ落ちているが、ほぼ形をとどめて出土しており一部に黒漆が残っている。石製品はF₄層より出土した砥石であり、層序内での出土状況はF₄層中からの出土量が最も多かった。本土壙の時期は他の土器とも対比して10世紀後半に位置付けられる。



第11図 SK 23土壤



第12図 SK 49土壤

S K 62土壙（図版9）

B区中央やや南西部、S B 2 建物跡西側49・50-58グリッドIII層上面で検出された不整円形を呈する土壙である。規模は径1.5mを測る。断面形は橢形を呈し、周壁は急激に掘り込まれ、底面からの立ち上がりも激しい。覆土は5層に分かれ、出土遺物は赤焼土器壺の完形・半完形が各1点、須恵器壺の半完形2点をはじめとする。他にF₂層より内面に野引を刻み込んだ帶状の曲物が出土している。

S K 63土壙（第13図）

B区南部東縁寄り、S B 2 建物跡南側51-60グリッドで確認された不整方形を呈する土壙である。断面形は台形を呈し、底面は起伏があるもののほぼ平坦である。覆土は単一層で出土遺物はなく、検出面からの深さ33cmを測る。

S K 98・99土壙（第13図）

C区南西部、S B 1 建物跡北側で検出された土壙である。S K98の平面・断面形は不整橢円形に南北で緩やかに掘り込まれる船底形である。覆土は2層で深さ15cmを測る。S K 99は径1.5m程の隅丸方形を呈し、底面の凹凸が激しい、覆土の堆積は黒褐色粘質シルトの単一層である。双方とも土器を包含しているが、細片で図示できるものはない。

S K 100土壙（第13図、図版9）

C区南西部S E 101井戸跡北隣り、18-96グリッドII層下部より掘り込みが始まる土壙である。平面形はひょうたん形をした不整橢円形で、長径2.8m、短径1.4mを測る。覆土は全体が炭化したしまりの無い弱粘質土で、わずかに土器をはさむがいずれも細片である。

S K 105土壙（第13図）

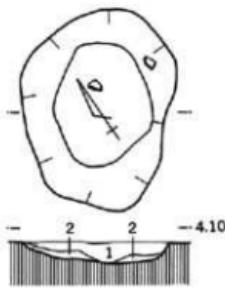
C区南西部S B 1 建物跡の直ぐ南で確認された、隅丸の長方形を呈する土壙であるが、南側が一部未調査区域にかかるため明確には把握できない。断面形は船底形で、覆土は4層に分かれるが、F₄は西半部壁面に添って堆積している。

S K 188土壙（第13図）

C区南部やや中央、20-95グリッドで検出されたほぼ円形な平面形に、鍋底状の断面形を呈する土壙である。深さは掘り方上面より48cmを測る。覆土は3層に分かれ、F₃からは土師器・甕片が出土しており、これまでより若干古い時期に相当する土壙である。

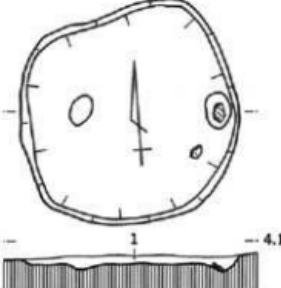
S K 198・199土壙（第13図）

C区南西部S K100の東西両隣りに位置する、平面形が円形を呈する土壙である。径約1.2mを測るS K198は覆土が3層に分かれ、壙底面に板材を埋め込んでいる。S K199は径約1.4mで断面形は皿形、灰色を帯びた黒褐色の粘質土を基調としている。両土壙とも土器の出土はなく、時期は不明である。



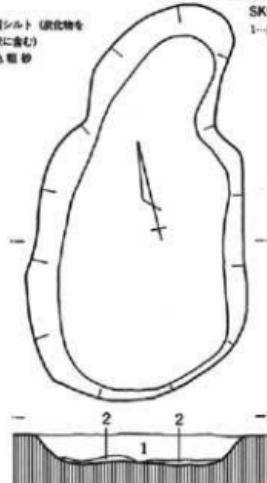
SK98

1—黒褐色粘質シルト (炭化物を
ブロック状に含む)
2—明青灰色粘砂



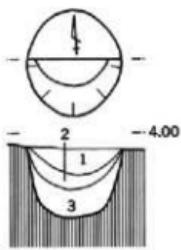
SK99

1—黒褐色粘質シルト (炭化物をブロック状に含む)



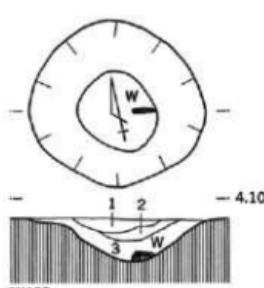
SK100

1—黒色粘質シルト (炭化した鉄性の弱い土
で、光沢の無い風を呈す)
2—明青灰色粘質砂



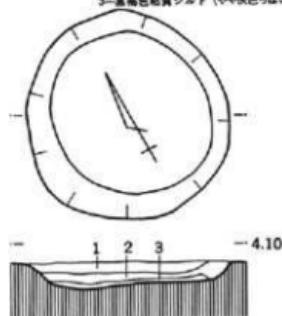
SK188

1—黒褐色粘質シルト
2—青灰岩粘土
3—暗青灰色粘質シルト (粘性が
強く水分を多量に含む)



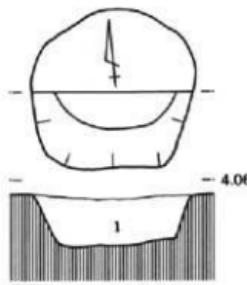
SK198

1—暗褐色粘質シルト (粘性が弱く、炭化物を多く
含む)
2—暗灰色粘質シルト (1をブロック状に含み、炭
化物が多い)
3—黒褐色粘質シルト (やや硬さっぽい)



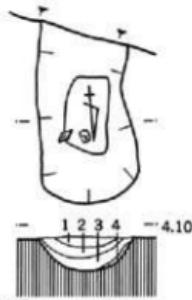
SK199

1—暗褐色粘質シルト (粘性が弱く炭化物
を多く含む)
2—黒褐色粘質シルト (より暗い灰色を帯
びている。粘性は弱い)
3—明青灰色粘質砂



SK63

1—にじい黄褐色粘質砂 (黒-緑の炭化物
と黄鐵鉄砂がまだら状に混入)



SK105

1—青褐色粘質シルト (比較的硬くしまる)
2—黒色粘質シルト (粘性の弱い炭化した土)
3—灰色粘質シルト (2をやや含む)
4—明青灰色粘質砂

0 1m

第13図 SK 63・98・99・100・105・188・199土壤

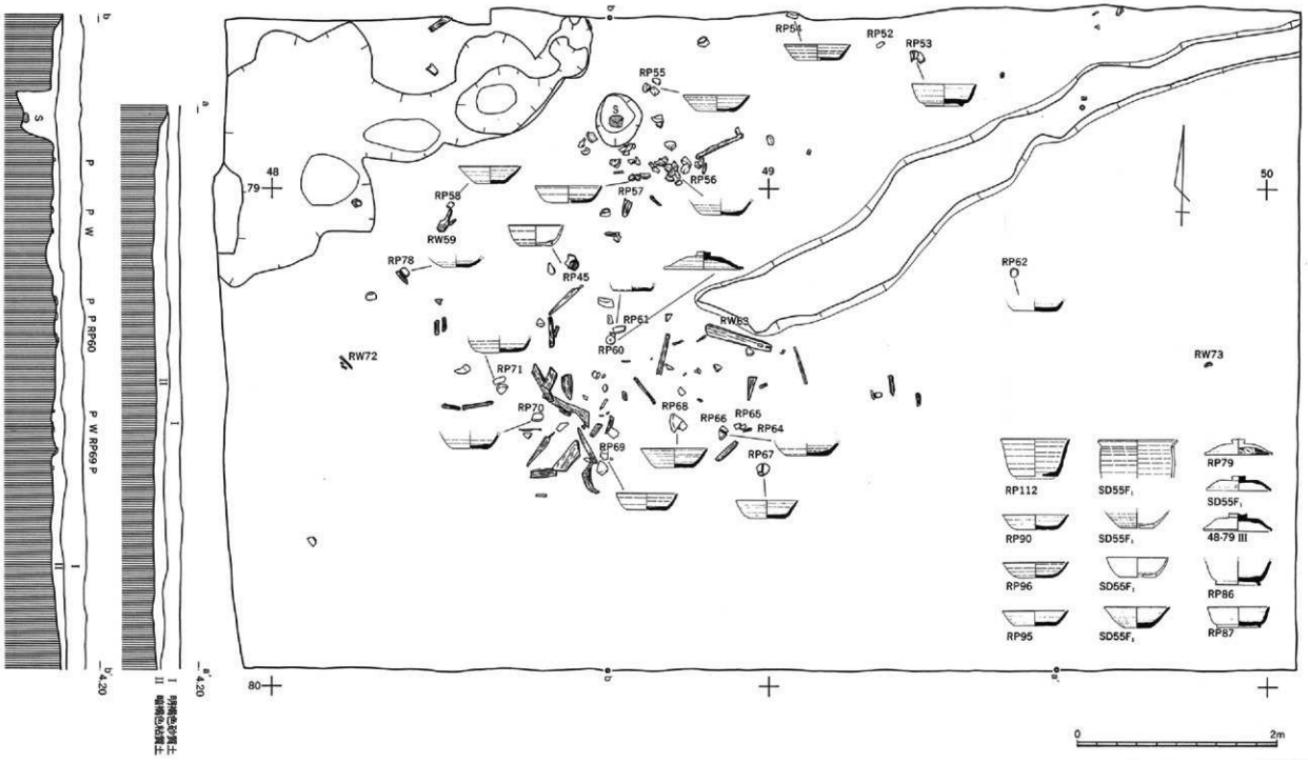
5 溝状遺構

本遺跡で確認され記載登録した溝状遺構は15条を数える。これらはその主軸方向によって2つに分けることができる。東西に走る溝状遺構と、南北に走る溝状遺構である。しかし磁北に合わせて掘り込まれたものではなく、旧地形という立地環境に合わせ、自然に添って掘り込まれた溝状遺構である。このため主軸方向の計測は東西が左側、南北が右側で測った。ここでは墨書き土器がまとまって出土したSD55・56溝状遺構を先述し、後に各精査区で検出されたそれについて述べる。

SD55・56溝状遺構（第14図、図版10・11）

計画排水路調査区Lトレンチ（第3図）西側、47～51-78・89グリッドIII層上面で、二条並行した状態で確認された東西に走る溝状遺構である。幅3mのトレンチ調査に、約4m幅の拡張区を加えた区域に限定されるため、溝状遺構一部分の検出であり、その全体の規模は把握できない。西側がSD55、SD56は東側で、約25～65cmの間隔を経るが、南西部トレンチ拡張区に至るとプラン検出面では区別がつかず、合流しているものと考えられる。検出された最大の長さはSD55が調査区西端部より10m、その東側のSD56は11mを測る。SD56底面は平坦であるのに対し、SD55のそれは検出北西部で2段・3段となり部分的に深くなる、起伏に富んだ凹凸の激しい底面である。主軸方向は両溝状遺構ともN-53°-Wとなる。覆土は両遺構とも2層に分かれ、F₁層が黒褐色粘質細砂、F₂層は暗青灰色粘質シルトである。覆土には炭化物がブロックまたは粒子状に含まれ、ほぼ粘土化した有機物を全体的にはさんでいる。F₁層では黄橙色の酸化質砂が縦筋状に現れ部分的に塊状となって混入している。

本溝状遺構からの出土遺物は土器・木製品・土製品の他、多数の木片が投げ込まれた状態で出土している。その分布を示すため第14図に主な土器・木片の出土地点を記し、測図できた土器を示した。検出面全体に散布しているというよりは、両遺構の接合部に当たる48-79グリッド付近に集中しており、SD55に密、SD56は希薄な出土状況となっている。完形品はないものの半完形やほぼ完形に近い土器、復元して完形を成すものや一括土器が多いという特徴を有する。土器の種類には土師器・須恵器・内黒土器・赤焼土器が見られ、その器種も蓋・甕・壺・高台付壺と多様に渡る。須恵器の壺や高台付壺にはその底部に墨書銘を入れた墨書き土器が多く、読み取れる銘の内訳は「稻」22点、「千」5点、「雜」「甲」「八十」「玉」「三内」「四」が各1点、銘不明や墨痕のある土器片も加えると総数49点に及ぶ。また赤焼土器壺内側底面に漆紙を認める漆紙不着土器や内黒土師器の蓋が出土している。木製品では第26図127の斎串と128のしゃもじが出土した。他にSD55出土の土鍤2点と籠の羽口がある。本遺構の時期は平安時代9世紀前半に位置付けられる。



第14図 S D55・56溝状遺構

S D21・22溝状遺構（第5図、図版12）

精査B区南縁側に2条並行した状態で検出された南北に走る溝状遺構である。S D21は西側、東側にS D22で約1.2～2mの間隔を経て並行している。S D21は上端幅0.8～2.4m、深さ42cm、検出長40mを図り、47—59グリッド付近でS E64井戸跡の西半部を切り込んでいる。S D22はそれぞれ1.3～3m、37cm、56mを図り、検出南西部で二股に分かれる。主軸方向はN—55°—Eであり、南西方向に延びる自然堤防の方向と一致する。覆土は3層に分かれ灰褐色粘質土を基調としている。断面形が船底形を呈し底面は比較的平坦なのにに対し、壁面は凹凸が激しく一部広くなる部分もある。

出土遺物はS D21に多く土器片・木製品を包含している。S D22出土で測図できた遺物は第20図38の須恵器長頸壺片だけであった。S D21F₂層からは木製品の出土が目立ち、ひしゃく・しゃもじ・曲物の底板や、黒漆で塗られた把手状木製品、それに硯が1点が出土している。本遺構の時期は平安時代11世紀中葉以降と考えられる。

S D24溝状遺構（第5図、図版12）

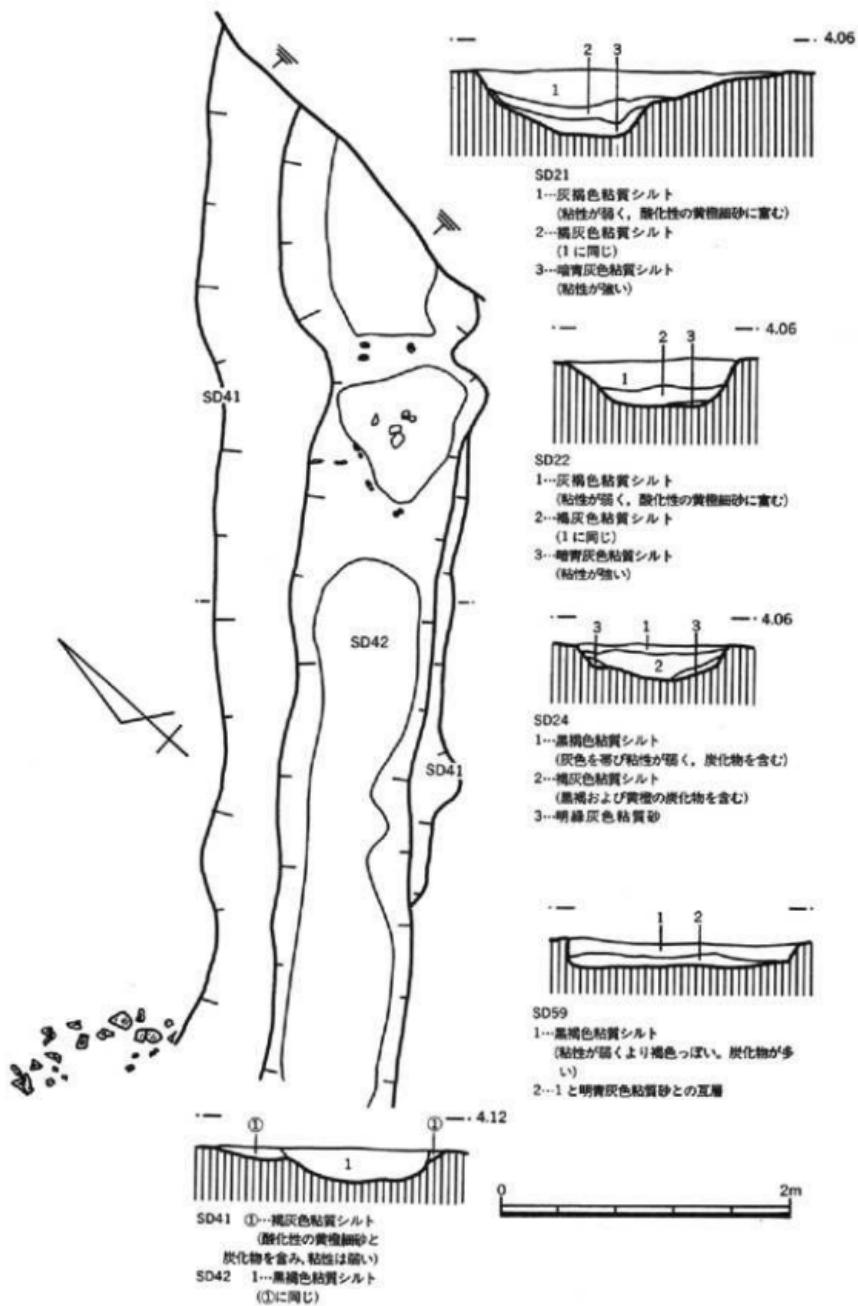
精査B区東隅部に中断して検出された、S D21・22と並行して走る溝状遺構である。規模は上端幅0.9～1.8m、深さ24cm、検出長は北側16m、南側12mを測り、主軸方向はN—50°—Eである。覆土は3層に分かれるが、南端部では擾乱を受けており層序が明確でない。検出部北側の55—57グリッド付近には、杭を打ち込んだ南側に板材をあてがって堰状に組んだ木材が検出された。出土した遺物は細片土器の須恵器・赤焼土器片であり、図示できるものはない。

S D41・42溝状遺構（第15図、図版12）

精査A区東南部64・65—36・37グリッドIII層上面で確認された南北に走る溝状遺構である。両溝状遺構は重複関係にあり、その覆土の観察からS D42が切っていることが判断された。S D41の上端幅は1.3～1.9m、深さ10cm、S D42は上端幅0.9～1.3m、深さ22cm、両者の検出長10mを測る。主軸方向はN—44°—Eで自然堤防の方向と一致する。覆土は単一層でS D41は緩やかに掘り込みが始まる。S D42底面は起伏に富んでおり、打ち込み杭や石の散乱がみられる。S D41からの出土遺物はなく、S D42の出土土器も細片のみである。

S D50・52溝状遺構

計画排水路調査区Jトレチで検出された東西に走る溝状遺構である。S D50は上端幅50cm、検出長15m、主軸方向はN—85°—Wを測る。S D52は最大幅1.5m、検出長7mでN—82°—Wである。覆土は炭化物粒子を含む暗褐色粘質砂を基調としており2層に分かれる。出土遺物は土器片とS D50出土のしゃもじで、土器にはS D50より墨書痕のある須恵器壺・高台付壺が5点・S D52からも墨書・墨痕を認める須恵器蓋が出土している。



第15図 S D41・42溝状造構と S D21・22・24・59土層断面

6 旧河川跡

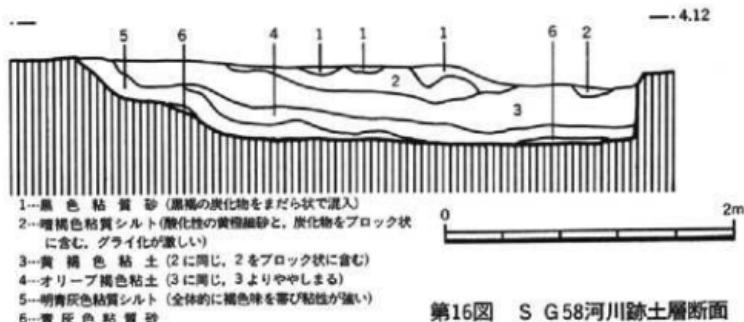
本遺構は精査A区で確認されたものである。第II章の地理的環境で述べた南興野遺跡南方100mを西流する新井田川旧支流の一部と推定される河川跡である。旧地形と遺跡の立地環境という観念をも踏まえ、以下に記述する。

S G58旧河川跡（第5・16図、図版13・14）

精査A区北西縁および中央部を、くの字形に走る河川跡である。A区北隅より市道新青渡線に添って南北方向へ走り、61-45グリッドに至ってその流路をほぼ直角に南東方向に変え、大きく蛇行（メアンダー）した跡を残している。規模は検出最大幅11m、最小幅6.2m、最浅部20cm、最深部63cm、検出された長さは精査区北端部から南西へ38m、これより蛇行して南東へ30mを測る。主軸方向は南北流路右岸でN-44°-E、南東流路左岸でN-57°-Wである。検出北半部の周壁は緩やかに落ち込み、段を有して底面に至る。深さ56~63cmの底面はほぼ平坦である。南半部の底面は凹凸が激しく部分的に深くなり、壁面は特に右岸で急激に立ち上がる。62・63・46・47グリッド上で自然堤防と並行して走るSD43溝状遺跡との重複関係にあるが、覆土の断面観察からSD43が本遺構を切っているものと判断された。断面形は北半部が船底形、南半部で底面の広い皿形を呈する。

覆土は4層に分かれ比較的自然堆積の様相を呈しているが、F₁層として捉える層上部に黒色粘質砂を含む暗褐色粘質土は、後世に破壊を受け激しい流れ込みがあった土質の状態を呈している。このため遺物の多くを包含している覆土層は、F₁層下の黄褐色粘土層とオリーブ褐色粘土層である。

本河川跡からの出土遺物は土器800点、近世陶器1点、木製品3点、自然遺物1点、その他2点で総数807点を数える。土器の内訳は土師器4片、須恵器222片、黒色土器3片、内黒土器6片、赤焼土器565片である。測図できた9点の土器を第27図に示したが、他は細片で図示できるものはない。特徴的な土器を示せば同図示138の身受け・蓋受けをもつ須恵器壊である。その他、底部が一段低い検出北部には、流木と見られる自然木が底面に密着状態で横たわり出土している。出土土器により11世紀後半頃の河川旧流路と推定される。



第16図 S G58河川跡土層断面

IV 出土遺物

1 遺物の分布

南興野遺跡第2次調査で出土した遺物は土器が整理箱にして41箱、木製品3箱、井戸枠組25枚(三基)、井戸眼2点、土製品・金属製品等が2箱である。遺物は精査B区域とC区南西部、J・L・Nの各トレンチ調査区から多く出土しており、遺構の分布状況と軌を一にする。本章では遺構内出土の遺物については各遺構毎に分けその概要と時期を述べ、包含層出土の遺物においては調査区内一括としてとりあげた。

調査で発見された遺物は総計17,186点を数え、その内訳は表2に示したとおりである。土器片は総数16,785片であり、赤焼土器と須恵器で大半を占め、出土土器の時期的な特徴として古代期の出土量が圧倒的に多い。しかし、検出遺構では古代と中世期の遺構の判別が土色や覆土の状態からは困難であった。器種では古代期を示す土器が甕・壺・蓋・坏であり、中・近世期では鉢・天目茶碗等である。木製品では井戸枠内より出土した斎車や箸、溝状遺構出土のしゃもじ、包含層出土の下駄などがある。土製品では遺構内・包含層とも土錘が数多く出土しており、他に輪の羽口がある。石製品の砥石や硯、金属製品では鉄滓の他古銭などがある。その他ひょうたん等植物の種子類も出土しており、古代の生活を考える資料になる。

遺跡全体における遺物の分布状況は、遺跡西半部に集中する傾向を示し、A・B・Cの精査区域とした地区である。遺構の密集度と軌を一にするが、遺跡北東部でも出土量が多い。しかしこの地域では遺構の分布が確認できず、耕地整理で遺構が破壊を受けていることもあり、土器片が散乱したものと考えられる。

表2 出土遺物点数表

出土地 (遺構内)	土器 片	須 恵 器 片	赤 焼 土 器 片	内 周 辺 土 器 片	春 秋 期 土 器 片	晩 期 土 器 片	中 世 期 土 器 片	中 世 期 鐵 滓	近 世 期 土 器 片	近 世 期 鐵 滓	土 製 品	石 製 品	木 製 品	金 屬 製 品	自 然 物	その 他	計	
SB	12	2		30														44
EB	4			4														8
SE	9	1		12										24				46
SK	21	246	1	28	523				2	2	1	1	8	2	2			886
SD	14	335	1	24	1,075		5		38	6	7	1	19	2	8	6	2,141	
SG	4	222	3	6	365				1				3		1	2	877	
EP	6	67		5	124				2									204
小計	45	1,895	8	63	2,385		5		43	8	8	2	54	4	10	8	4,136	
2500m ²	184	4,407	10	221	7,264		29	26	67	36	27	2	7	17		5	12,342	
X-0	6	237		15	427		4		11	8								208
小計	190	4,544	10	236	7,711		33	26	70	64	27	2	7	17		5	13,050	
合計	235	6,139	18	296	10,094		38	26	121	72	25	4	61	21	10	13	17,186	

2 遺構内出土遺物

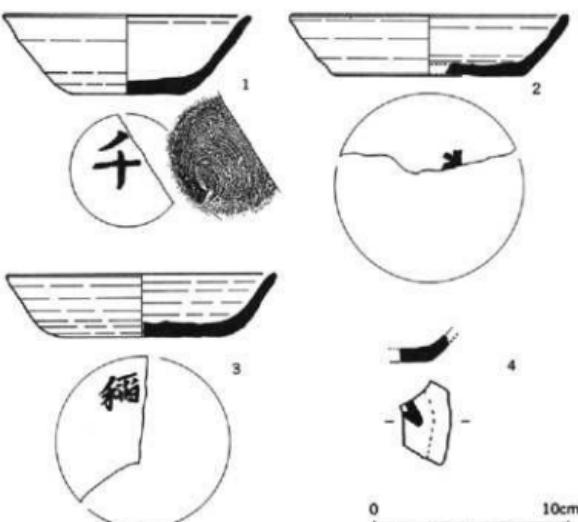
南興野遺跡の今次の調査では、建物跡・井戸跡・土壙・溝状遺構・旧河川跡などの遺構が検出され、S K23等の土壙と S D55・56溝状遺構および S G58河川跡から多くの土器が、3基の井戸跡と溝状遺構から木製品が多く出土した。以下これら出土遺物について、遺構毎にその概要と推定時期を述べる。

(1) 建物跡出土遺物 (第17図、図版15、表3)

建物跡は二棟確認されている。柱穴掘り方の埋土から須恵器12片、黒色土器2片、赤焼土器30片が出土した。黒色土器、赤焼土器はすべて細片で測図に勘えるものがなかった。第17図に上げた土器は須恵器の中で、建物跡の時期や、特徴を示すものを上げた。1・2はS B1 E B48柱穴より出土した須恵器坏片である。1は、底部の切り離しが回転糸切り離し技法で、底から直線的に外傾し、口縁端部が若干外反する。器面に明瞭にロクロ痕を残し、底部周辺には布ナデによる調整が施されている。底部中央には「千」の字が墨書きされている。2は、底部を回転ヘラ切り手法で切り離し、ナデ等による調整が認められる。底径が大きく、器高が低い口径の広い坏である。器面全体にナデによる再調整が施されている。底部には文字等の解読が出来ない墨痕がある。4はS E 2建物跡E B78柱穴より出土した須恵器底部片である。回転糸切り手法で切り離しているが細片のため詳細は不明である。底部に解読不明の墨痕が認められる。

(2) 井戸跡出土遺物 (第17・18図、図版15、表3)

調査で検出された井戸跡は三基である。精査B区でS E64井戸跡がS D21溝状遺構と重複して確認されている。S E101・104井戸跡は精査C区で確認されている。S E104は単独で検出されたものである。井戸跡内からの出土遺物は須恵器の9片、黒色土器1片、赤焼



第17図 建物跡・井戸跡出土土器

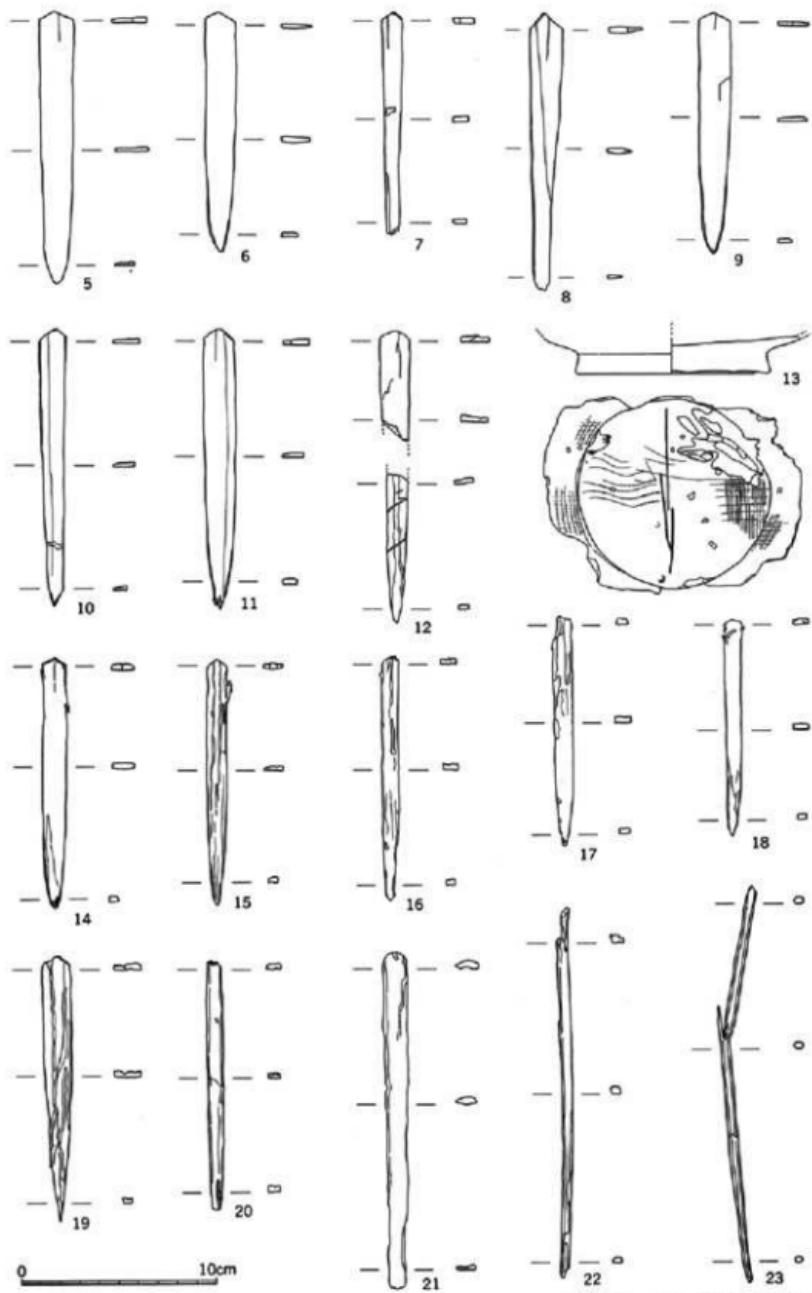
土器12片、木製品24点である。土器は第17図3の須恵器1点が測図出来、他は細片のため図化が不可能であった。木製品は、斎串、箸状木製品、皿形である。本節では測図土器が出土したS E64井戸跡から記述する。3は井戸内埋土F①層より出土した須恵器坏片である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後ナデ調整が施されている。ヘラおこし痕を中心に残している。口径に比して底径が大きく、器高は低い。器形は、底部より体部にかけて丸味をもちらながら急激に立ち上がり、口唇部でやや外反する。底部には「稻」の墨書銘が読みとれる。時期は平安時代9世紀後葉に比定される。その他の土器については、

表3 建物・井戸跡出土遺物観察表

探査	遺物 番号	種 類	計測値 (m/m)			色	調	胎 土	構成	底面切 離	調整技 法	備 考	出 土 地 点
			U(横) L(縦) 厚	幅 幅	高 度								
第 17 回	1	須恵器	坏	128	59	40.5	Hue2.5Y8/2 灰 白	黒 密	堅	回転糸切り	ロクロ紙、墨書鉛「千」	E8148F2 (SB1)RF137	
	2		坏	144	98	31	Hue2.5Y8/1 灰 白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ紙、墨書鉛不明	E8148F2 (SB1)	
	3		坏	(139)	90	32	Hue5Y7/1 灰 白	黒 密	堅	ヘラ切り	ロクロ紙、墨書鉛「稻」	SE64F①	
	4		坏				Hue2.5Y8/3 灰 黄	粗砂混	良	回転糸切り	墨書鉛不明	E878F1 (SB2)	
第 18 回	5	木製品	斎串 (縦×横×厚) 140×17×2	完	形	主頭・劍先状で15m/mの切り込み						SE64F②	
	6		斎串 122×15×3	完	形	主頭・劍先で切り込みなし						SE64F②	
	7		斎串 144.5×8×3	下	端	欠	主頭状で16m/mの切り込み					SE64F③	
	8		斎串 143×12.5×3	下	端	欠	主頭状で22m/mの切り込み、削り切り					SE64F③	
	9		斎串 124.5×15.5×2	完	形	主頭・劍先状で8m/mの切り込み						SE64F④	
	10		斎串 142×11×2.5	完	形	主頭・劍先状で切込みなし、削り切り						SE64F④	
	11		斎串 144×15.5×3	完	形	主頭・劍先状で16m/mの切り込み、削り切り						SE64F④	
	12		(87)×14×2.8 (77)×10×2	中 央 部 欠	端	損	主頭・劍先状で切り込みなし					SE10IF①	
	13		皿 98 (19)	口 縁 部 欠	端	一枚の加工						SE10IF②	
	14		斎串 (縦×横×厚) 129.5×12×3	完	形	主頭・劍先状で11m/mの切り込み 左側上頭方向、右側劍先方向より毛羽状の削り込み						SE10IF③	
	15		斎串 128×10×2	完	形	主頭・劍先状で2本の切り込み、8m/mと7m/m 右側上頭方向より毛羽状の削り込み						SE10IF④	
	16		斎串 126.5×8×3	完	形	主頭・劍先状で7m/mの切り込み						SE10IF④	
	17		斎串 119×9×3	完	形	劍先状で切り込みなし						SE10IF⑤	
	18		斎串 112×8×3	完	形	劍先で両側に垂頭方向より毛羽状削り込み、左側2段						SE10IF⑤	
	19		斎串 137×14×3	完	形	垂頭・劍先状で4m/m切り込み、先端鋭く削り						SE10IF⑤	
	20		斎串 129×6×3	上 端	欠	削り切り						SE10IF⑥	
	21		斎串 174×11×4	完	形	内面に多少弯曲						SE10IF⑥	
	22		箸 190×4×4	上 端	欠	下端劍先状、5面削り切り						SE10IF⑦	
	23		箸 204.5×5×4	完	形	両端劍先状、6面削り切り、中央部より折損						SE10IF⑦	

細片で測図に勘えるものがなかった。

木製品は斎串、箸状木製品、皿形である。S E64井戸跡では井戸跡覆土F②・F③層から斎串7点が出土している(第18図5~11)。長さ114mm~144mm、厚さ2~3mmの頭部を圭頭に削り、頭部へ8~22mmの切り込みがある。6~10には切り込みがみれなかつた。また、7~8は下端部が欠損している。



第18図 井戸跡出土木製品

S E101井戸跡からは、須恵器・赤焼土器片が出土したが細片のため測図出来なかった。木製品は、S E64と同様斎串と皿形、箸状木製品が出土している。斎串はすべて主頭状に削られ、長さ112~174mm、厚さ2~4 mmを測る。井戸への祓いに係るものと考えられる。皿形は一枚の板を割り出し皿としている。口縁部が欠損しているが近いものと考える。箸状木製品は2本出土した。長さ190~205mm、一辺4~5 mm四辺形となり、小刀による削り痕がみえる。S E104井戸跡内からの出土遺物は須恵器細片の出土で、図示出来なかつた。

(3) 土壌内出土遺物 (第19図、図版18、表4)

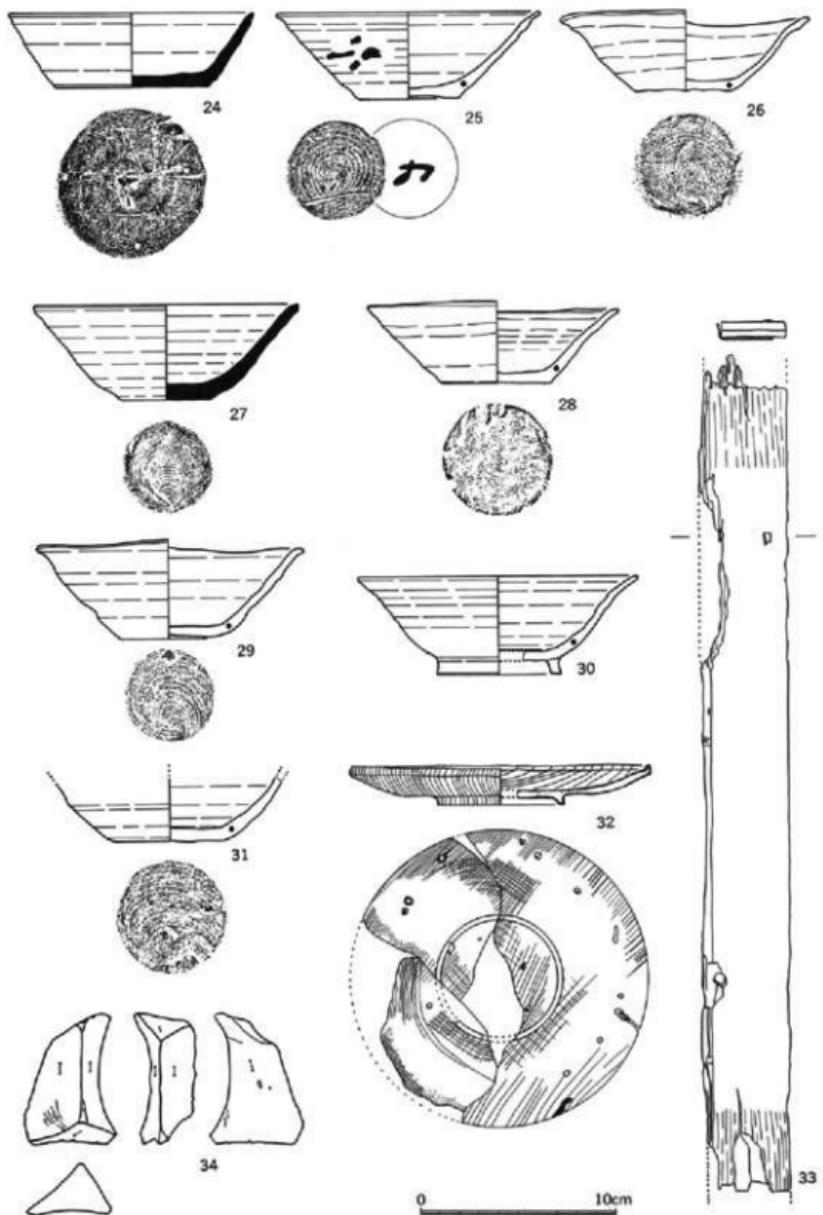
調査で確認された土壌は12基を数える。各土壌から多少を問わず土器、木製品、石製品が出土している。その総数は886点である。その内訳は土器873片、木製品8片、金属製品2点、土製品・石製品各1点、自然遺物である。土器では赤焼土器が573片、次いで須恵器

表4 土壌内出土遺物観察表

測定 番号	遺物 番号	器 種	計測値(mm)			色	調	胎 土	燒 成	底 部	切 離	回転技法	備考	出土地 点
			口径	底盤	高度									
第 19 回	24	須恵器	坏	126	80	38	Hue7.5YR7/1 白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ風	SK23F2 RP36		
	25	赤焼土器	坏	136	49	44	Hue7.5YR8/2 白	粗砂混	悪	糸切り	ロクロ風「十」カ	SK23P3 RP37		
	26		坏	130	51	41	Hue5YYR7/6 白	粗砂混	良	糸切り	ロクロ風	SK23P2 RP32		
	27	須恵器	坏	137	45	49	Hue5YR8/2 白	粗砂混	良	糸切り	ロクロ風	SK62F4 RP125		
	28		坏	129.5	56.5	42	Hue7.5YR8/3 淡 貴 橙	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ風	SK49F3 RP119		
	29	赤焼土器	坏	137	50	49	Hue7.5YR8/3 淡 貴 橙	致 密	惡	糸切り	ロクロ風	SK62F4 RP124		
	30		高台 付坏	144	64	51	Hue7.5YR7/6 焼	粗砂混	惡	切り離し不明	ロクロ風	SK49F5 RP120		
	31		坏		57	(32)	Hue5YR7/6 淡	粗砂混	良	回転糸切り	ロクロ風	SK62F4		
	32	木製品	皿	155	65	20							SK49F5 RW121	
	33		曲物	(幅×横×厚) 40.5×43.2×8						1カ所極度で継じる			SK62F2	
	34	石製品	砥石				Hue2.5YR8/3 淡						SK49F3	

246片、土師器21片である。ここでは土壌内出土遺物の中で、営まれた時期を示すものや性格を明示する遺物を測図し、第19図に示した。なかでもSK23・49土壌からは一括した状態で完形またはそれに近い形で出土し、時期や性格等を決定する好資料として検出している。器種別にその特徴を明示し以下に記述する。

S K23土壌からは須恵器・赤焼土器・木・石製品が検出されている。土器は4点が一括して出土した。第19図には測図可能な3点をあげた。24は埴土3層出土の須恵器坏である。底部の切り離しを回転ヘラ切り離し技法を施し、ヘラおこし痕が深く残っている。底部はヘラ切りによる段をわずかに残しやや丸味をもちながら立ち上がる。体部にヘラによるナデ痕を残す。25・26は赤焼土器坏である。両者共に底部を回転糸切り離しである。25の体部には「十」の墨痕がみえ、底部にも「力」の字がうすく読み取ることが出来る。両者共



第19図 土壤出土遺物

に胎土に粗砂を混入し、歪つな形となる。体部に明瞭なロクロ痕を残している。SK49土壤からは28の赤焼土器坏、30の赤焼土器高台付坏、32の木製品皿、34の砥石が出土している。28・30は両者共に底部を回転糸切りで切り離され、体部に明瞭なロクロ痕を残す。58の器形は底部より直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。30は、高台部よりやや丸味をもちらながら大きく外反し、更に口縁部で大きく外反する。両者共に粗砂を混入し、歪つとなる。32は、一枚板による径15.5cm、高さ2cmをもつ皿形木製品である。底部中心を欠損しており、体部に草木根による穴が穿たれている。表裏面共に漆等の塗布は認められない。34は全面共擦痕を残している砥石である。62土壤からは、27の須恵器坏、29・31の赤焼土器坏、33の曲物板材が出土した。27は覆土4層より出土、底部を回転糸切り離し、底部より丸味をもちらながら立ち上がる。体部に明瞭なロクロ痕を残し、口縁部でやや外反する。29・31は底部の切り離しを回転糸切りにより、29は底部から体部にかけてやや丸味をつけながら立ち上がる器形を呈し、口縁部で急激に外反する。31は、同様に丸味をもちらながら立ち上がるが、29より丸味がつよい。体部に明瞭なロクロ痕を残し、器肉は比較的厚い。33は曲物板材片である。幅405mm、長さ432mm、厚さ8mmを測る。端部は一部板材が残り二重となる。二重になる部分では桜皮による留めが施されている。

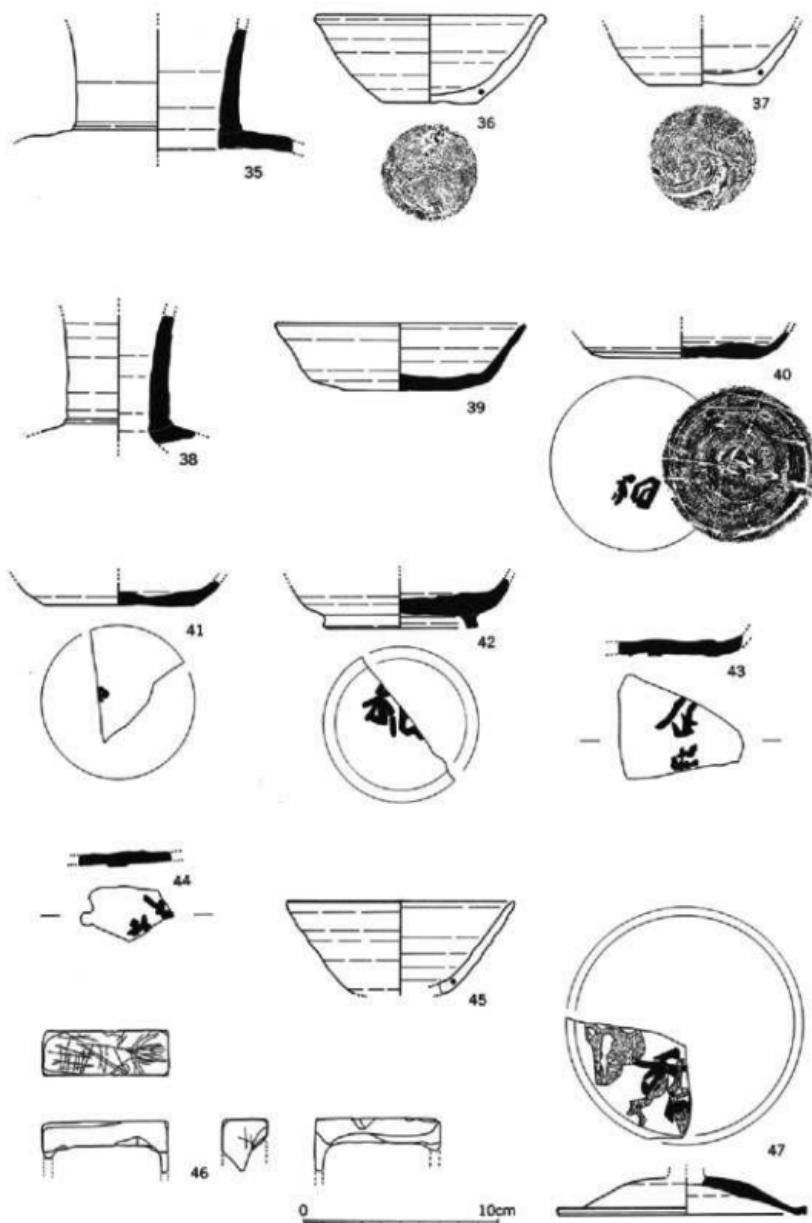
土壤の時期はその覆土中からの出土土器により、SK23土壤は10世紀前半、SK49・62土壤は10世紀後葉と推測される。

(4) 溝状遺構・旧河川跡出土遺物 (第20~27図、図版19~27、表5~8)

今次の調査で検出された溝状遺構は15条を数える。また旧河川跡は、本遺跡北部に南北となる幅約10mの旧河川跡である。溝状遺構は磁北に対して約45°の傾きをもち南北に走るものが多いが、本遺跡が立地する地形に添って営まれたものと思われる。ここでは、遺物が多数出土し、遺構の時期や性格を図示出来る遺物や特異な遺物を載せた。

SD21溝状遺構からは第20図35・36・37、46が出土している。35は須恵器長頸壺の頸部片である。口唇部は欠損しているが、器形は肩部が張り出し頸部で直角に立ち上がる。肩部より頸部にかけて緑灰色の自然釉が付着している。36・37は赤焼土器坏である。底部の切り離しを回転糸切りとし、底部から体部にかけて丸味をもちらながら立ち上がる。口唇部ではわずかに外反する。46は硯片である。硯の海部を利用し、周囲を研磨しており、砥石として二次利用された石製品が出土した。本遺構からは、第26図128の杓子、131~133のヘラ、把手・蓋板の木製品が出土した。本遺構の時期は36・37の土器により、平安時代11世紀前半と推測される。SD22溝状遺構からは、38の須恵器長頸壺が覆土上層より出土した。35より頸部の径は小さいが形態は同様である。頸部分に暗黒灰色の自然釉が付着している。

計画排水路調査区域のLトレンチでは、多量の木片や木製品と共に墨書きされた土器片が



第20図 満状遺構出土土器・甌

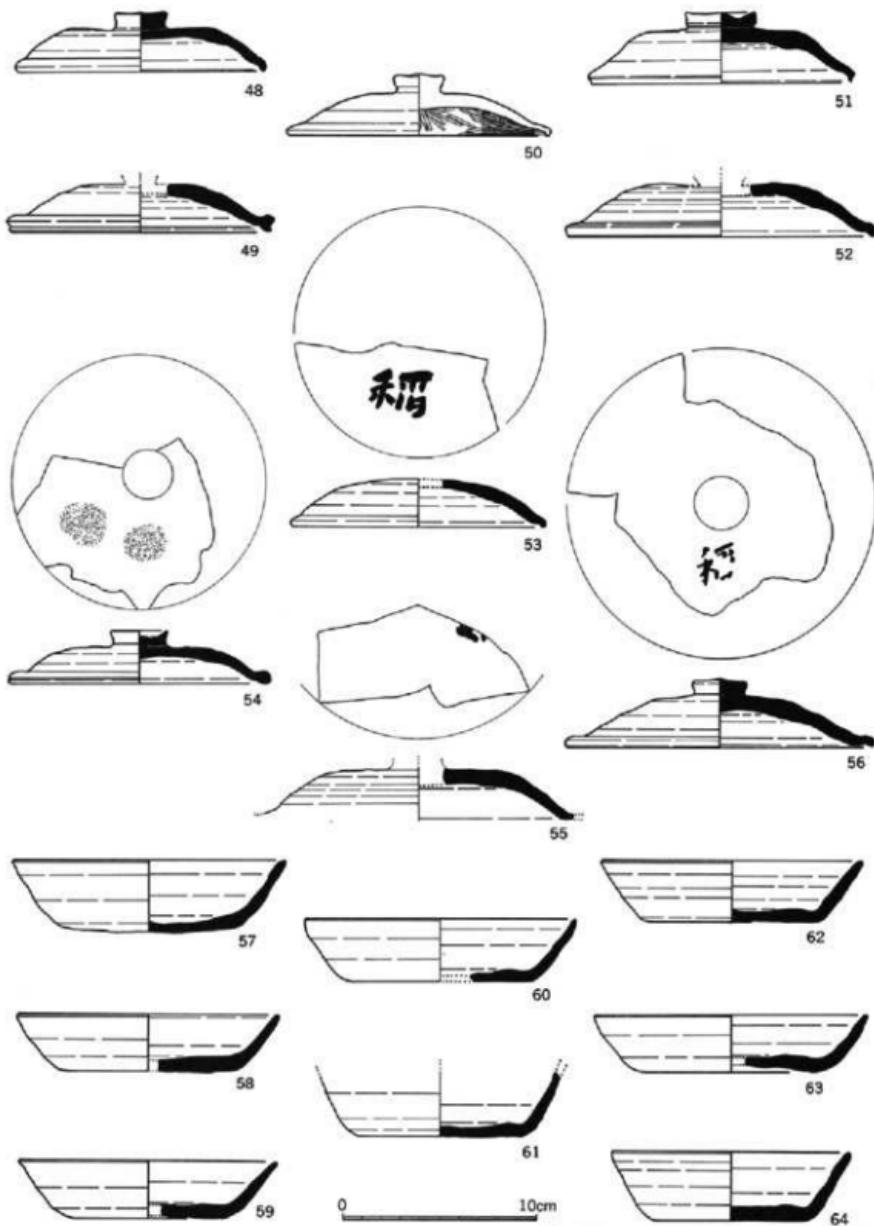
多数検出し、更に集中する部分を拡張したところ溝状遺構が二条重複して検出した。以下に出土遺物を記す。SD55からは第21図～25図の48～121の須恵器・内黒土器・赤焼土器、土製品の他、第26図127・130の木製品が出土した。土器の器種別では壺・高台付壺・蓋・甕である。壺では底部の切り離しが回転糸切りのもの(75・76・77・116・118)とその他は回転ヘラ切りの切り離し技法を施しているものである。回転糸切り離しが施される壺の器形は、口径に比して底径が約2対1となるものが多く、77はわずかに底径が他と比べてやや大きくなる。底部から体部にかけて大きく外反しながら立ち上がり、口唇部でやや内反する77と、やや外反する78がある。底部には「千」と墨書きされている。(75～77)。回転ヘラ切りを施す壺では、口径に比して底径が広い土器がほとんどで、その割合も1対0.7と、口径と底径との差が少ないものが多い。しかしそのうちでも67・70は、底径から口縁部にかけて大きく開く器形を呈し、その割合もやや底径が小さくなる。また器肉もうすぐ、他は厚い傾向を示している。底部には、「稻」と墨書きされたもの(53, 56, 70～73, 80～96)の他、「縄」(74), 「甲」(79), 「干」(98), 「玉」(99), 「云」(109)と文字が異なる壺が出土している。また赤焼土器壺内面に漆紙が付着した土器が出土した。赤外線写真で測定した結果、紙には文字が書かれた跡が見られなかった。これらの時期は、8世紀後葉から9世紀前半にかけてと推測される。その他の遺物では119・120の土鍤や121の羽口、127の斎

表5 溝状遺構出土遺物観察表(1)

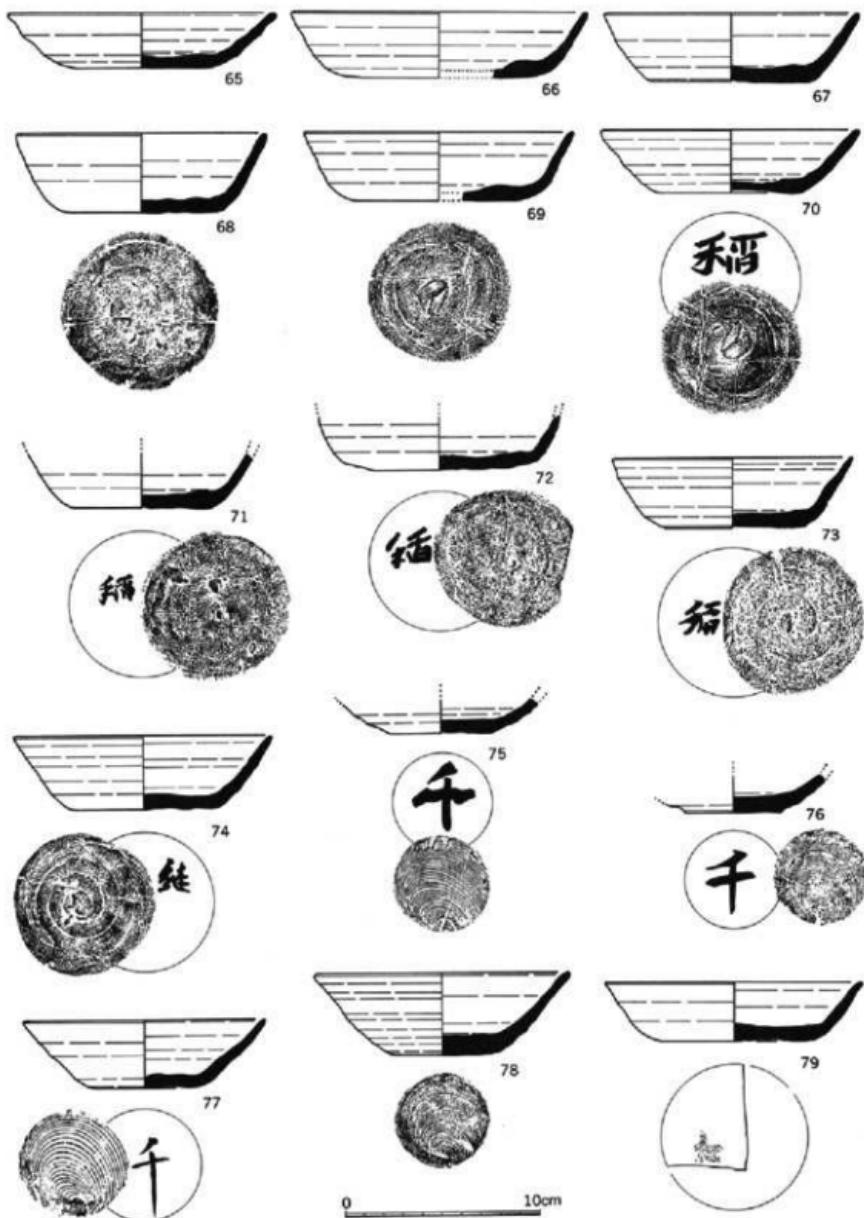
測定	測定	器種	目	直徑	深さ	底径	色	調	胎	施	底部切離	調査技法・備考	出土位置
測定	測定	器種	目	直徑	深さ	底径							
	35	須恵器	貝附壺			(64.5)	Hue7.5Y 6/1	致密	堅			ロクロ模	SD21F
	36	赤燒土器	壺	118	58	45	Hue5GYR 7/6	粗砂質	良	回転糸切り	ロクロ模	SD21F	
	37		壺		57	(28)	Hue10R 6/8	粗砂質	良	回転糸切り	ロクロ模	SD21F	
	38	須恵器				61	Hue2.5GY 6/1	致密	堅			ロクロ模	SD22F
	39		壺	130	75	35	Hue2.5Y 8/2	粗砂質	良	ヘラ切り	ロクロ模	SD22F	
	40		壺		90	(14)	Hue2.5Y 8/3	粗砂質	堅	ヘラ切り	ロクロ模、墨書き跡「頬」	SD22F	
	41	須恵器	壺		77	12	N7 灰白	致密	堅	ヘラ切り	ロクロ模、墨書き跡「頬」	SD22F	
	42	轟付	壺		80		N7 灰白	致密	堅		ロクロ模、墨書き跡「稻」	SD22F	
	43		壺				Hue7.5Y 8/1	致密	堅	ヘラ切り	墨書き跡不明	SD22F	
	44		壺		48		Hue5Y 8/2	粗砂質	良	ヘラ切り	墨書き跡不明	SD22F	
	45	赤燒土器	壺	117.5		(49)	Hue10YR 8/3	粗砂質	良		ロクロ模	SD22F	
	46	石製品	鏡				Hue5Y 6/1					SD21F	
	47	須恵器	壺	112		20	N7 灰白	致密	堅		ロクロ模、内面転用面、墨書き有り、墨書き「稻」	SD22F	
	48	須恵器	壺	137		30	Hue10Y 6/1	致密	堅		ロクロ模	SD22F	
	49		壺		135		Hue5Y 2/2	致密	堅		ロクロ模	SD22F	
	50	内黒土器	壺	136.5		31.5	Hue7.5Y 8/3	粗砂質	良		内面ミガキ後黑色処理	SD22F, RP79	
	51	須恵器	壺	135		35.5	Hue8 7/1	致密	堅		ロクロ模	SD22F	
	52		壺	(159)		(27)	Hue7.5Y 6/1	致密	堅		ロクロ模	SD22F	
	53	須恵器	壺	132		25	Hue7.5Y 4/1	致密	堅		ロクロ模、墨書き「稻」	SD22F, RP77	
	54		壺	136		27	Hue2.5GY 6/1	致密	堅		ロクロ模、墨書き有り	SD22F	
	55	須恵器	壺			(26)	Hue10Y 7/1	致密	堅		ロクロ模、墨書き不明	SD22F	

表6 溝状遺構出土遺物観察表(2)

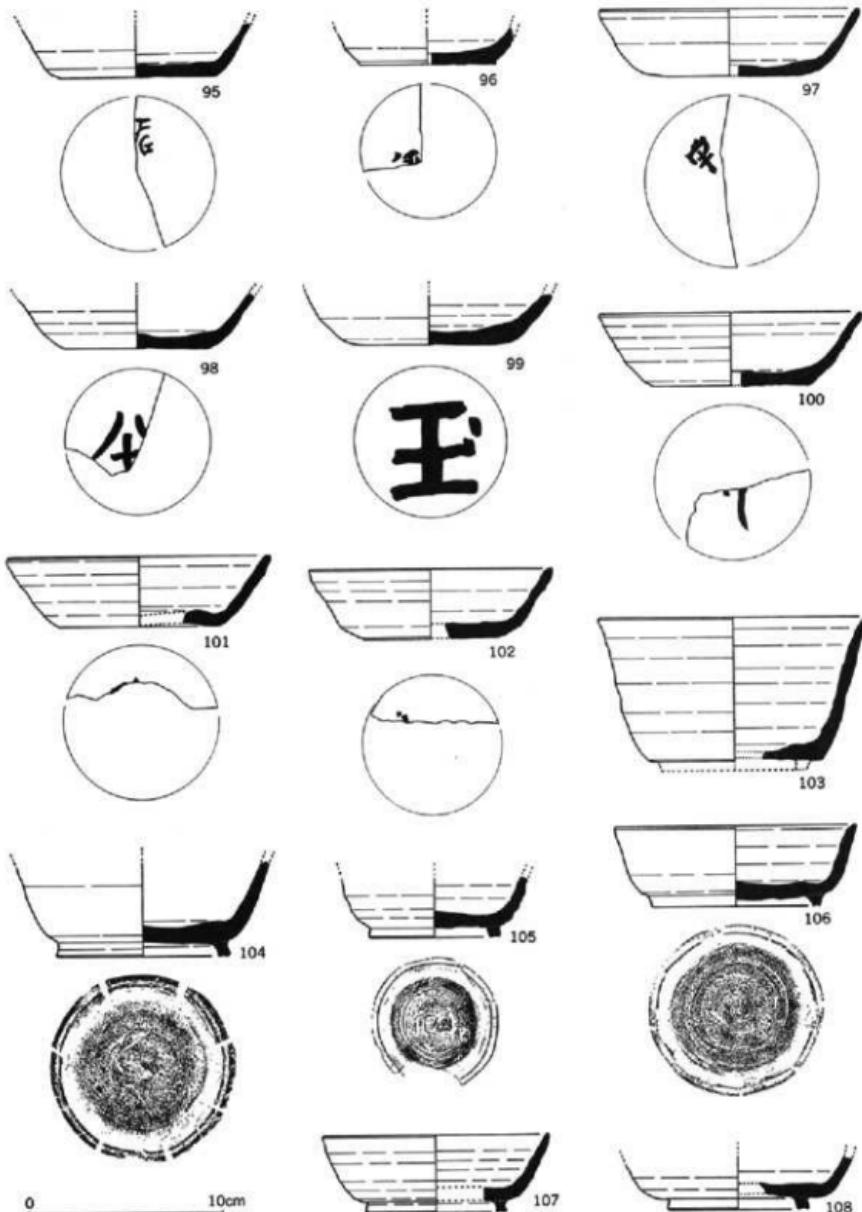
測定番号	器種	計測値 (mm)		色調	胎土	焼成	断面切面	調整技法・備考	出土地点(2)	
		口径	底径							
21	56	154	36	Hue10Y 7 / 1 灰白	粗砂混	良		ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP60	
	57	142	92	37	Hue2.5Y 6 / 1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	58	135	86	36	Hue10Y 6 / 1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	59	134	80	29	N7 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	60	140	90	32	Hue2.5Y 8 / 3 淡青	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	61		86	(34) 灰白	Hue2Y 5 / 1	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	62	136	84	31	Hue2.5Y 7 / 1 明オーライフ灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	63	141	85	30	Hue2.5Y 6 / 2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
22	64	124	80	34	Hue2.5Y 6 / 2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	65		64	28	Hue2Y 8 / 2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	66	154	(80)	34	Hue2.5Y 8 / 2 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65 III
	67	130	85	35	N7 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	68	130	80	46	Hue2.5Y 8 / 2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	69	140	(85)	35	Hue2B 7 / 1 明青灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,
	70	134	72	32	Hue2.5Y 8 / 2 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP55
	71		76	(27) 灰白	Hue2Y 8 / 1	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP70
23	72		74	(27) 灰白	Hue2.5Y 8 / 2	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP71
	73	124	79	36	Hue2.5Y 7 / 1 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP67
	74	134	72	38	Hue2.5GY 7 / 1 明オーライフ灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP68
	75		51	(17) 灰白	Hue2.5Y 6 / 1	緻密	堅	回転余切り	ロクロ底、墨書き[千手]	SD65F, RP78
	76		50		Hue2Y 8 / 1	緻密	堅	角切り	ロクロ底、墨書き[千手]	SD65F, RP93
	77	125	56	34.5	Hue2Y 7 / 3 淡黄	緻密	堅	回転余切り	ロクロ底、墨書き[千手]	SD65F, RP58
	78	133	51	41	Hue2Y 8 / 1 灰白	粗砂混	堅	回転余切り	ロクロ底	SD65F,
	79	134	76	36	Hue2.5Y 7 / 3 淡黄	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨底有り	SD65F, RP90
24	80	133	(83)	32	Hue10YR 4 / 2 灰青灰	粗砂混	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP54
	81	123	41	33	Hue2.5Y 8 / 3 淡黄	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP69
	82		75	(30) 灰白	Hue2Y 7 / 1	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP47
	83		85	(14) 明青灰	Hue10BG 7 / 1	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP80
	84		92	(25) 灰白	Hue2.5Y 8 / 2	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP91
	85		75	(10) 灰白	Hue2Y 7 / 2	粗砂混	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP61
	86		106	(21) 灰白	Hue2Y 8 / 1	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP10
	87		89	(22) 灰白	Hue2.5Y 8 / 1	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP10
	88		88	(11) 灰白	Hue2.5Y 8 / 2	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP99
	89		76	(27) 灰白	Hue2Y 7 / 2	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]カ	SD65F, RP98
	90	134	65	33	Hue10YR 5 / 4 ニホン・黄鶴	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP96
	91		78	(22) 灰白	Hue2.5Y 8 / 1	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F,
	92	134	84	30	N7 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]	SD65F, RP95
	93		76	(21) 灰白	Hue2.5Y 8 / 2	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]カ	SD65F, RP94
	94	143	86	30	Hue2.5Y 8 / 2 灰白	緻密	良	ヘラ切り	ロクロ底、墨書き[縦]カ	SD65F,



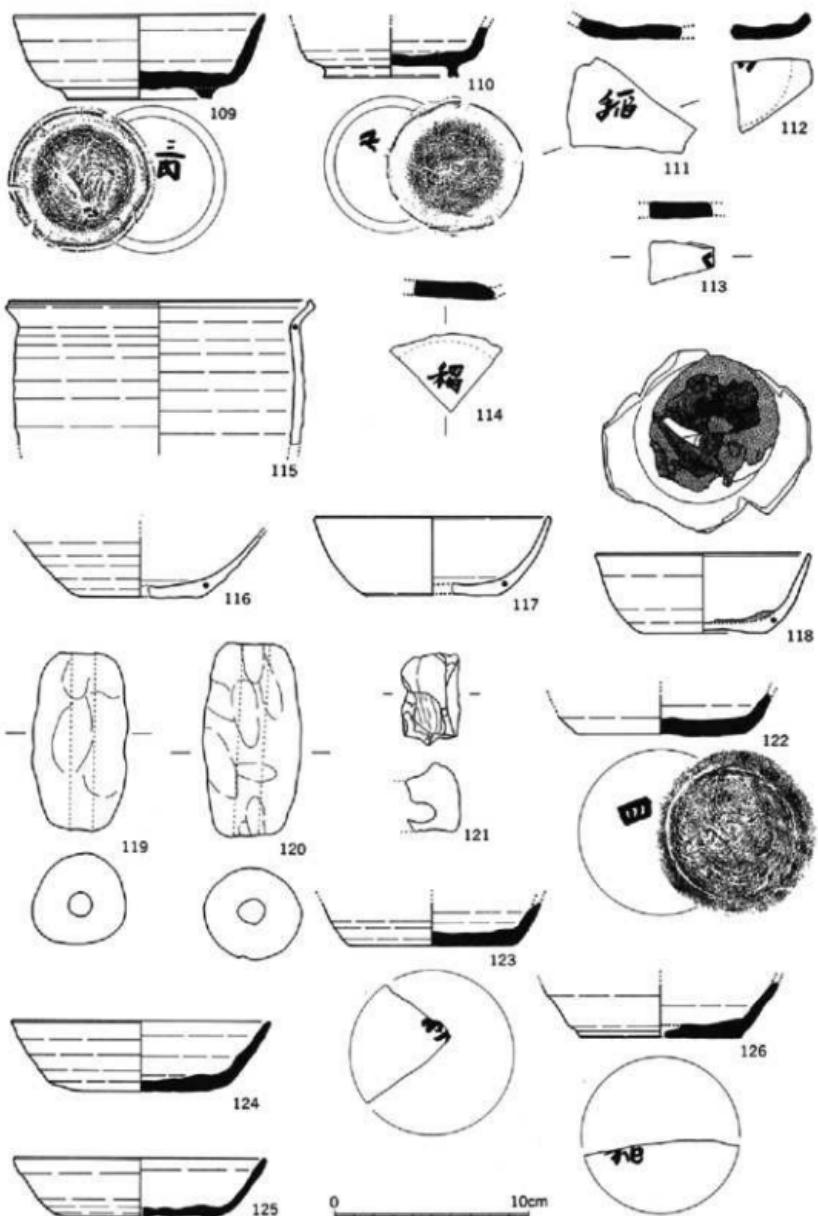
第21図 S D55溝状遺構出土土器(1)



第22図 S D55溝状造構出土土器(2)



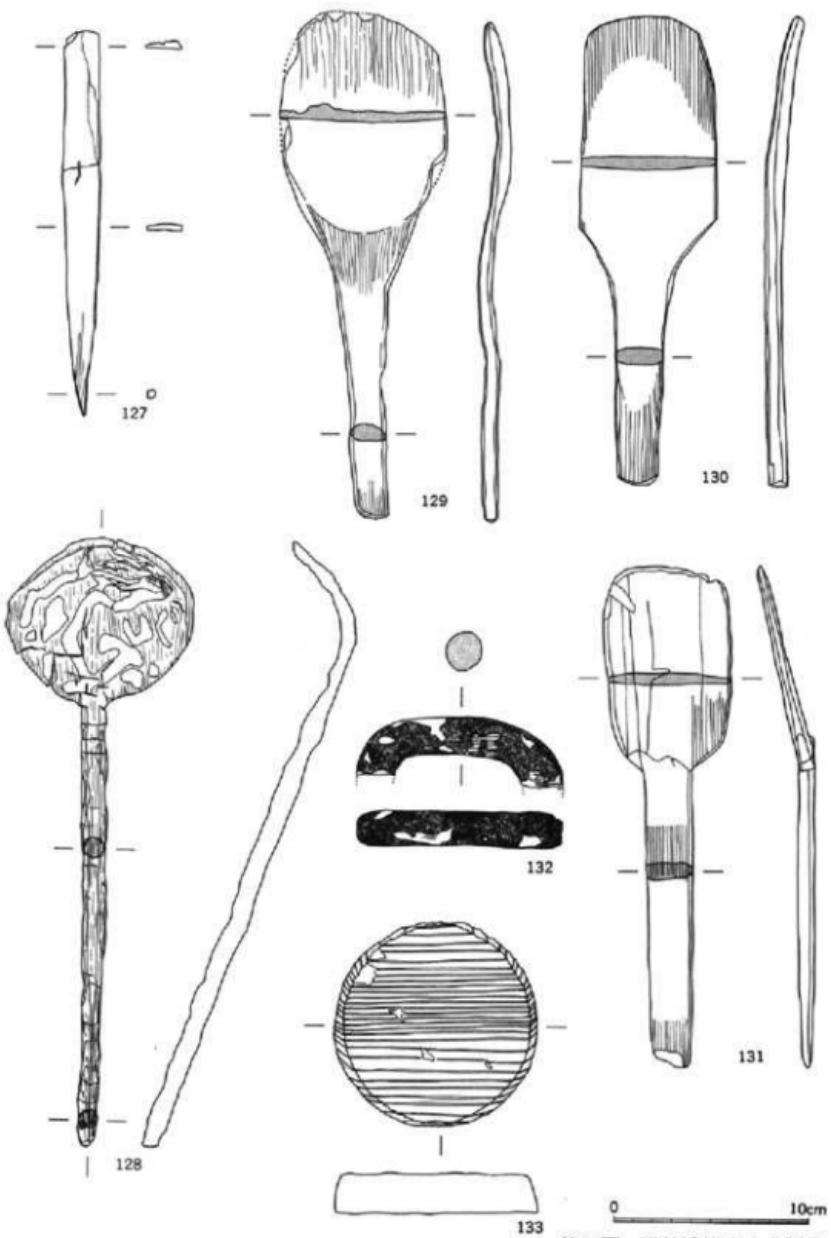
第24図 S D55溝状造構出土土器(4)



第25図 SD 55・56溝状遺構出土土器・土製品⑨

表7 溝状遺構出土遺物観察表(3)

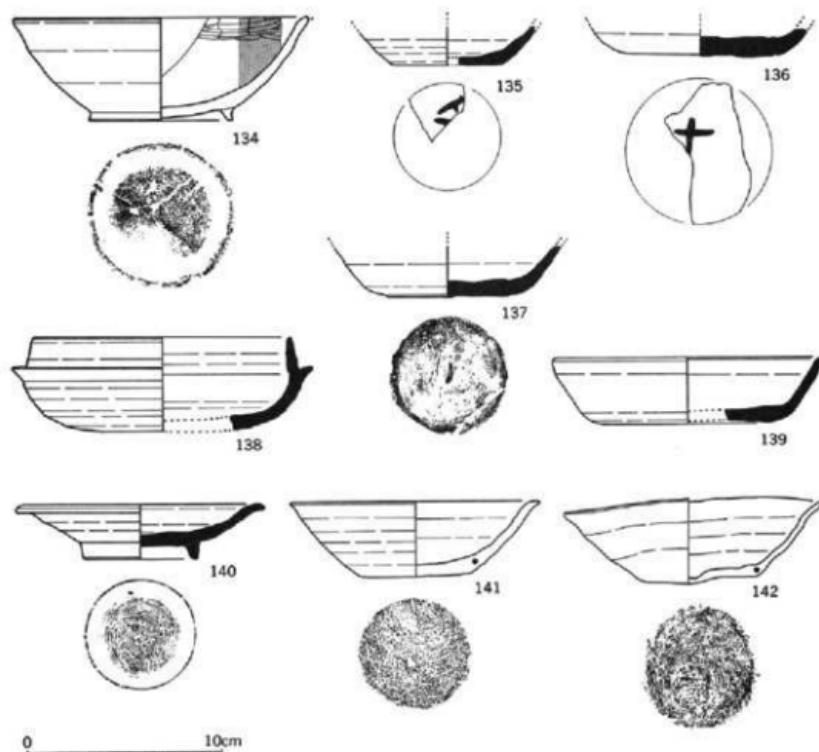
辨認	遺物番号	器 像	計測 質 (m/m)			色	調	胎 土	施成	直部切端	調査技術・備考	出土地點
			口 径	底 径	高							
24 溝 壁 墓	95	坪	80	(26)	Hue7.5Y 8/1 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「面」△		SD65F, RP97	
	96	坪		(71)	(19)	Hue7.5Y 8/2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「面」△	SD65F, RP101	
	97	坪	135	(90)	33	N7 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「甲」△	SD65F, RP57	
	98	坪		76	26	Hue10Y 7/1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「今」△	SD65F, RP56	
	99	坪		80	26	Hue10Y 6/1 灰	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「玉」△	SD65F, RP56	
	100	坪	136	(80)	38	Hue7.5Y 6/1 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き不明	SD65F, RP92	
	101	坪	136	(82)	36	Hue7.5Y 8/2 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き不明	SD65F, RP98	
	102	坪	126	(76)	36	Hue2.5Y 8/2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き不明	SD65F, RP106	
	103	高 台 片	140	(80)	75	N46 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F, RP112	
	104	高 台 片		92.5	(48)	N46 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F, RP96	
25 溝 壁 墓	105	高 台 片		67	(31)	N46 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,	
	106	高 台 片		125	87	N44 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。転用底	SD65F, RP87	
	107	高 台 片		117	(72)	N55 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,	
	108	高 台 片			(22)	Hue2.5GY 5/1 オリーブ灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き有り	SD65F, RP117	
	109	高 台 片	130	75	44	N7 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「内」△	SD65F, RP53	
	110	高 台 片		70	(26)	N46 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き不明	SD65F, RP98	
	111	坪				Hue7.5Y 5/1 灰	緻密	堅	ヘラ切り	墨書き不明	SD65F, RP65	
	112	坪				Hue2.5Y 8/2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	墨書き不明	SD65F, RP102	
	113	坪				Hue2.5GY 7/1 明オリーブ灰	緻密	堅	ヘラ切り	墨書き不明	SD65F,	
	114	坪			(75)	Hue5Y 8/2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	墨書き「頬」△	SD65F, RP104	
26 非焼土器	115	壺	155		(73)	Hue17.5YR 7/3 にごい椎	粗砂混	良		ロクロ底	SD65F,	
	116	坪		(62.5)	(31.5)	Hue2.5Y 8/3 淡黄	粗砂混	良	回転あかり	ロクロ底	SD65F,	
	117	坪	121	(68.5)	40.5	Hue10YR 7/3 にごい黄	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,	
	118	坪	111	64	41.5	Hue2.5YR 7/3 にごい椎	粗砂混	良	回転あかり	ロクロ底 内面底部漆紙付蓋	SD65F, RP45	
	119	土 罐				Hue2.5Y 8/1 灰白	粗砂混	軟			SD65F, RP64	
27 土 罐 品	120	土 罐				Hue10YR 8/3 淡黄	粗砂混	良			SD65F, RP52	
	121	弱 口				Hue5Y 3/2 オリーブ	粗砂混	良			SD65F,	
	122	坪		87	(21)	Hue10Y 6/1 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き「四」△	SD65F, RP62	
28 須 漆 器	123	坪		85	(22)	Hue2.5Y 8/2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	ロクロ底。墨書き不明	SD65F, RP119	
	124	坪	135	85	36	Hue2.5Y 6/1 灰	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,	
	125	坪	130	78	31	Hue2.5Y 8/2 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底	SD65F,	
	126	坪		83	(27)	Hue2.5Y 8/2 灰白	粗砂混	良	回転あかり	ロクロ底。墨書き「頬」△	SD65F, RP109	
	127	壺 串 (壺 × 棒 × 頭) 199 × 18 × 3									SD65F, RW72	
29 木 制 品	128	門 子	313.5 × 12 × 10.5								SD21F, RW126	
	129	～ ラ	261 × 96 19 × 8								SD65F, RW41	
	130	～ ラ	241 × 90 24 × 8								SD65F, RW59	
	131	～ ラ	257 × 61.5 22 × 6								SD21F, RW29	
	132	把 手	160 × 19 × 18								SD21F,	
30	133	壺	105 × 104 × 20								SD21F,	



第26図 溝状遺構出土木製品

表8 旧河川跡出土遺物観察表

測定 番号	種 類	計測 項目 (mm)				色	調 査	胎 土	焼成	底部 切形	調整 技法	備考	出土 地点
		内 径	外 径	底 厚	高 さ								
第 134	内黒土器 須 残 環	154	15	53	Hue10YR 8/3 内黒地 灰白	粗砂面	良	粗粒未切り	ロクロ板				SG58F ₂ RP83
			(55)	(20)	Hue5T 8/2	粗 砂	良	余 切 り	ロクロ板、墨書き「千」				SG58F ₂
			74	(14)	NB 灰白	粗 砂	良	ヘ ラ 切 り	墨書き「十」				SG58F ₂
			66	(26)	Hue5Y 8/1 灰白	粗砂面	良	ヘ ラ 切 り	ロクロ板				SG58F ₂
		133		47	N5 灰白	粗砂面	良		ロクロ板				SG58F ₂
		139.5	(36)	33.5	Hue10YR 8/3 須 黑地 灰黄地	粗砂面	良	ヘ ラ 切 り	ロクロ板				SG58F ₂
		130	66	28	N4 灰	粗砂面	良	粗粒未切り	ロクロ板				SG58F ₂
第 135	赤燒土器 环	127	58	39	Hue10YR 6/4 に点状黃斑	粗砂面	良	ヘ ラ 切 り	ロクロ板				SG58F ₂
		133	62	39	Hue7.5YR 7/6 同	粗砂面	良	余 切 り	ロクロ板				SG58F ₂



第27図 SG581旧河川跡出土土器

串、130ヘラ状木製品が出土した。SD56からは、須恵器環が出土している。形態的にはSD55出土の須恵器環の同様であり、底部に「皿」(122)、「稻」(126)の墨書きが読みとれるもの他、墨痕を有するものがある。SG58旧河川からは内黒土器(134)、須恵器(135~140)、赤焼土器(141・142)が出土した。すべてが坏形土器で、器黒土器のみが高

台を有する环形土器である。溝状遺構では坏の他、須恵器蓋も出土している。(48・49・51～55) 50は内黒土器の蓋である。やや偏平な宝珠形をもつつまみ部をもつもの(48・56)，つまみ部の中心でつまみ部の高さと同じになるもの(51)，つまみ部がリング状になるもの(54)がある。内黒土器蓋の50は、内面ケズリ後黒色化処理が施され、つまみ部がやや宝珠形となる。体部はやや丸味をもち、口縁部で直下になるものや、丸くなるものとに分かれる。

本遺構の時期は、8世紀後半から9世紀前半に推測される。

3 包含層出土遺物 (第28～31図、図版28～30、表9・10)

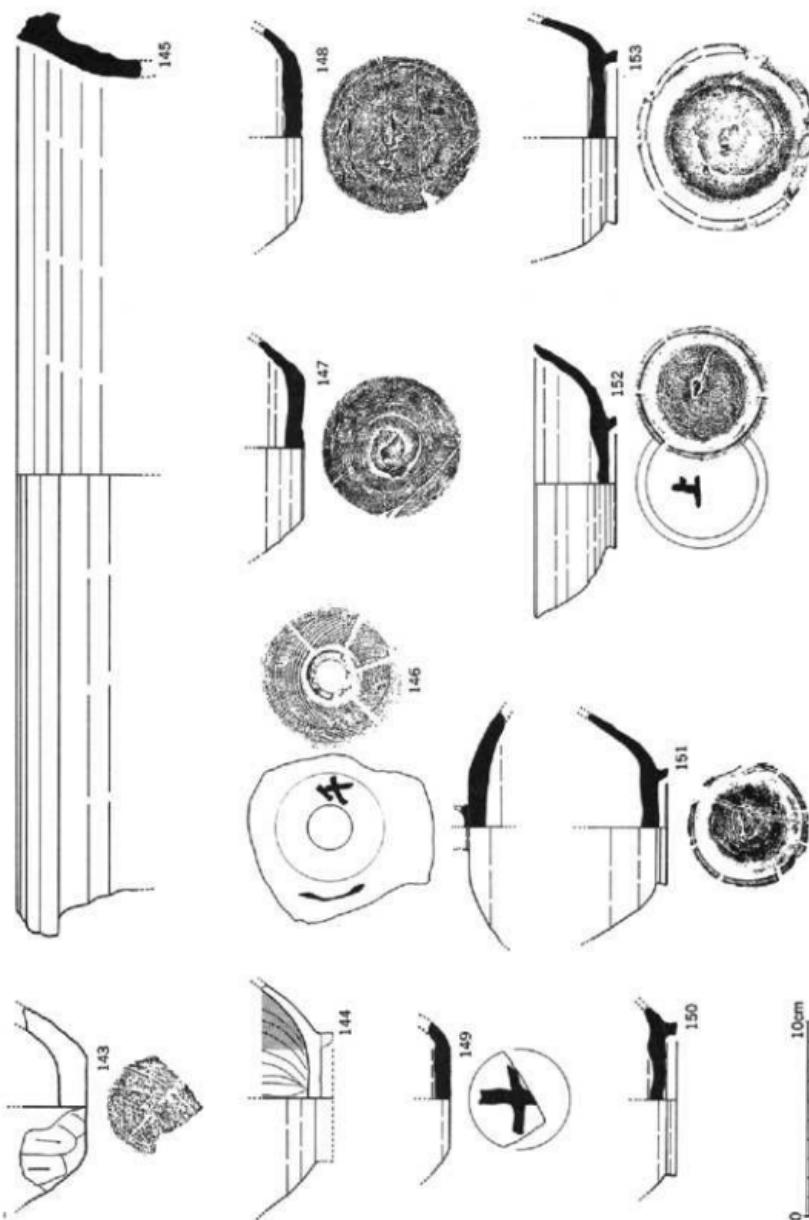
今次で調査された本遺跡の面積は遺構・遺物の集中地域を探るため設定したトレンチや、決定された精査区域は6,810m²になる。これらの粗畠・精査区域で取り上げた数は13,050片である。ここでは比較的図示出来、かつ遺跡の時期や特徴を明示出来る遺物を第28～31図にまとめた。以下に記述する。143は土師器底部片である。底部は木葉痕を残し、体部への立ち上がり部分にヘラ削りが施されている。144は内黒土器高台付坏である。高台部と口縁部が欠損しており、内面にヘラ削り後黒色化処理が施されている。145～189は須恵器である。器種は坏・高台付坏(150～135, 179・180), 三(176～178), 壺(181, 182), 長(145・146, 189)である。坏は回転糸切りとヘラ切りがあり、ヘラ切りが多い。高台付坏も同様で、ヘラ切りが多い。器形はS D55出土の环形土器(67・70)と類似し、169・174は糸切

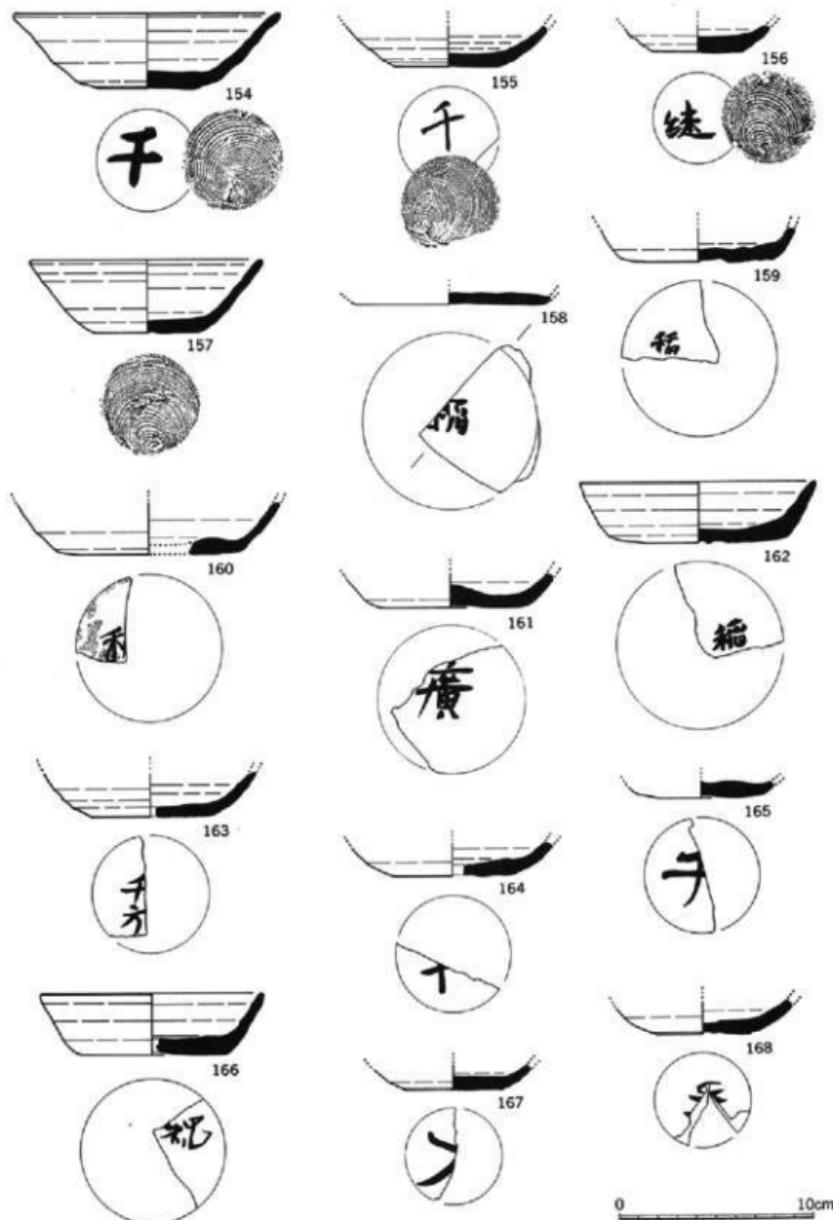
表9 包含層出土遺物観察表(1)

No.	遺物番号	器種	計面積(m ²)	色	調査	土	焼成	底面切削	調整方法	備考	出土地位置
第	143	土師器 底	便	55 (33)	Hue10YR 8/2 灰白	粗砂質	良			底部木葉痕	19-95III
	144	内黒土器 高台付 片		(65) (33)	Hue2.5YR 7/3 にぶい緑	粗砂質	堅	回転糸切り	ロクロ底 内面ヘラ削り後黒色化処理		23-92III
	145		便	452 (63)	Hue2.5Y 4/1 灰	緻密	堅		ロクロ底		64-41III RP24
	146		便		Hue5GY 7/1 明オリーブ灰	緻密	堅	回転糸切り	ロクロ底 ヘラ削り		13-100III RP13
	147		坏	72 (24)	N8 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底		32-79III RP20
	148		坏	82 (19)	Hue10Y 8/1 灰白	粗砂質	良	ヘラ切り	ロクロ底		41-74III RP23
28	149		坏	52 (11)	Hue10Y 8/1 灰白	緻密	堅	糸切り	ロクロ底 墨書き「千」		19-93III RP86
	150	高台付 坏	80 (16)	Hue10Y 8/1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底		22-91III	
	151	高台付 坏	60.5 (46)	Hue10Y 8/1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底 輪用模		37-79III	
	152	高台付 坏	140 68	Hue2.5Y 8/1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底 輪用模 墨書き「千」		49-79III RP79	
	153	高台付 坏	89 (46)	N7 灰白	緻密	堅	回転ヘラ切り	ロクロ底		58-57III	
	154		坏	126 51.5	Hue10Y 8/1 灰白	緻密	堅	回転糸切り	ロクロ底 墨書き「千」		12-95III
29	155		坏	52 (21)	Hue2.5Y 8/3 淡黄	緻密	堅	回転糸切り	ロクロ底 墨書き「千」		17-95III
	156		坏	48 (14)	Hue2.5Y 8/2 灰白	緻密	堅	回転糸切り	ロクロ底 墨書き「千」		17-106III
	157		坏	121 51	Hue2.5Y 7/1 明オリーブ灰	緻密	堅	糸切り	ロクロ底 墨書き「千」		19-94III RP50
	158		坏	90	N8 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	墨書き「千」		49-79III
	159		坏	80 (17)	Hue10YR 8/1 灰白	粗砂質	良	ヘラ切り	ロクロ底 墨書き「千」		49-79III
	160		坏	75 (27)	Hue5Y 8/1 灰白	緻密	堅	ヘラ切り	ロクロ底 墨書き「千」		45-79III
30	161		坏	76 (17)	Hue1.5Y 灰白	粗砂質	良	ヘラ切り	ロクロ底 墨書き「千」		38-78III

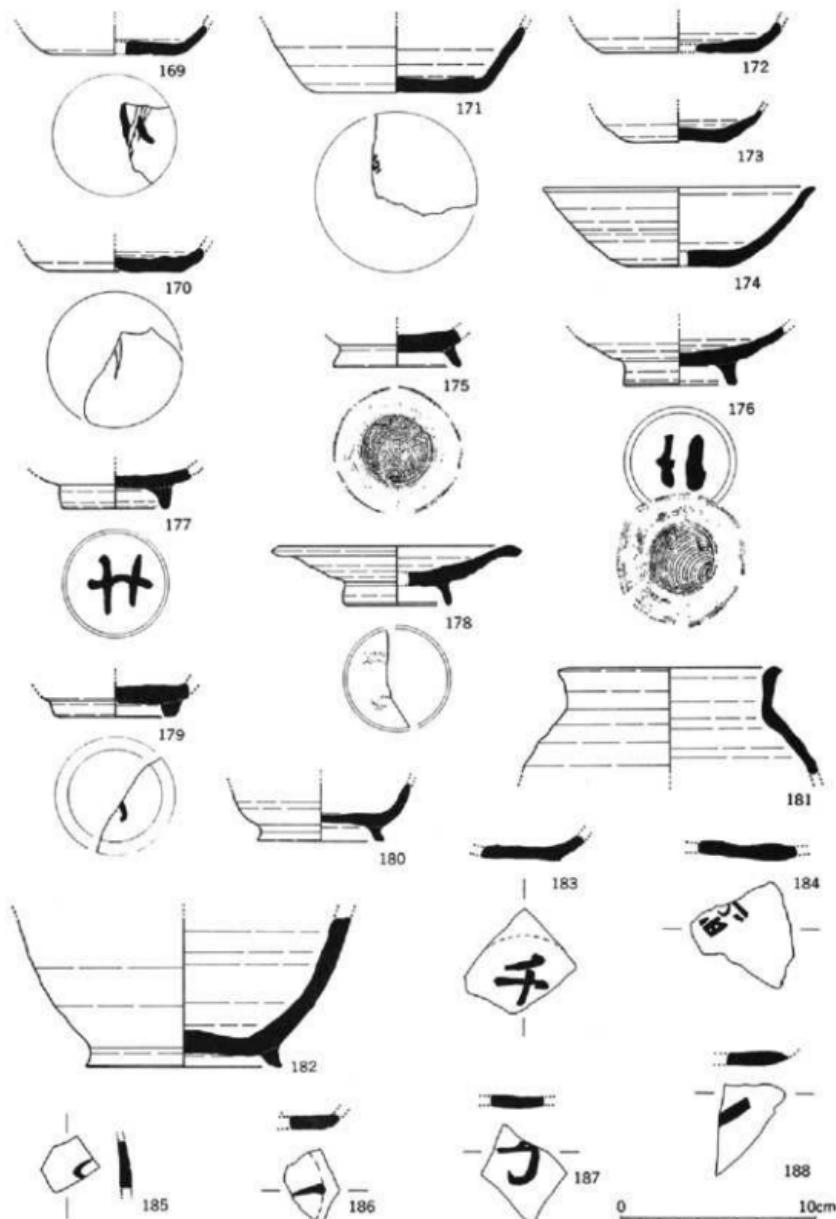
表10 包含層出土遺物觀察表（2）

探査 番号	遺物 番号	器 種	計測 値 (mm)			色 調	胎 土	焼成 度	縦部切端	横型枝 法・備考	出土 地點 位置
			口 径	底 径	厚 さ						
29	162	环	122	86	32	Hue2.5Y 8/1 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	クロロ底。墨書き「福」	45-79II
	163	环	(60)	(23)		Hue5Y 7/1 灰白	致密	堅	糸 条 切 り	クロロ底。墨書き「福」	14-100III RP24
	164	环	(29)	(17)		Hue2.5Y 8/1 灰白	粗砂混	良	回転糸切り	クロロ底。墨書き「十」の 20-96III RP46	
	165	环	60			Hue10Y 8/1 灰白	致密	堅	糸 条 切 り	墨書き「千」	x-0
	166	环	116	(75)	32	Hue5Y 8/1 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	クロロ底。墨書き「祝」の 19-95II RP11	
	167	环	56	(13)		N7 灰白	致密	堅	糸 条 切 り	クロロ底。墨書き不明	20-95III
30	168	环	59	(16)		Hue10Y 8/1 灰白	粗砂混	良	回転糸切り	クロロ底。墨書き不明	19-92III RP46
	169	环	(64)	(14)		Hue10YR 7/3 にぶい赤	致密	堅	糸 条 切 り	クロロ底。墨書き不明。 ヘラ記号	21-93III
	170	环	70	(12)		Hue7.5Y 8/1 灰白	致密	堅	ヘラ切り	クロロ底。ヘラ記号	14-93III
	171	环	84	(33)		Hue2.5Y 8/1 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	クロロ底。墨書き不明	RP108
	172	环	80	(15)		Hue2.5Y 8/2 灰白	粗砂混	凡	ヘラ切り	クロロ底	23-87III
	173	环	55	(16)		Hue10Y 6/1 灰	致密	堅	ヘラ切り	クロロ底	19-94III RP107
	174	环	141	53	41	Hue5Y 6/1 灰白	致密	堅	糸 条 切 り	クロロ底。輪用網	x-0
	175	瓦 片	66	(19)		N7 灰白	致密	堅	回転糸切り	輪用網(正面内外両面)	22-106III
	176	瓦	58	(29)		N4 灰	致密	堅	回転糸切り	クロロ底。墨書き「サ」の RP25	13-100IV RP25
	177	瓦	56	(21)		Hue7.5YR 7/1 明緑灰	致密	堅	回転ヘラ切り	クロロ底。墨書き「サ」の 19-95III	
	178	瓦	129	55	30	HueB 5/1 青灰	致密	堅	回転糸切り	クロロ底。青灰育り	13-100III RP17
	179	高 行 片	62	(17)		Hue7.5YR 7/1 明緑灰	致密	堅	回転糸切り	墨書き不明	19-95III
	180	高 行 片	65	(30)		N7 灰白	致密	堅	回転糸切り	クロロ底	49-69III
	181	蓋	115	(56)		N7 灰白	致密	堅		クロロ底。自然付着	23-91III RP26
	182	蓋	102	(77)		N5 灰	致密	堅	ヘラ切り	外部ロア板。内部ナデ K51	21-94III K51
	183	环				N8 灰白	致密	堅	回転糸切り	クロロ底。墨書き「千」	19-95IV
	184	环				Hue10YR 8/2 灰白	粗砂混	良	ヘラ切り	墨書き「福」	61-65III
	185	环				N7 灰白	致密	堅		クロロ底。墨書き不明	x-0
	186	环				Hue10Y 8/1 灰白	致密	堅		墨書き不明	18-92III
	187	环				Hue5Y 8/2 灰白	致密	堅	糸 条 切 り	クロロ底。墨書き不明	12-100III RP48
	188	环				Hue5Y 7/1 灰白	致密	堅	ヘラ切り	墨書き不明	
31	189	裏				N8 灰白	致密	堅		表…指子目タテキ 裏…背面波紋アド込み	43-74III RP24
	190	土 製 品	土 輪			Hue7.5YR 7/4 にぶい緑	粗砂混			丸形	76-79III
	191	土 輪				He2.5YR 6/8 緑	粗砂混				43-74III
	192	赤 陶 土 器	壺	(376)	(61)	Hue10YR 7/2 にぶい黄緑	粗砂混	良		クロロ底 表…タテキ、内…ハゲ目	x-0
	193	赤 陶 土 器	裏	(165)	(72)	Hue7.5YR 7/4 にぶい緑	粗砂混	軟		クロロ底、ロクロナデ 内側スリット等	x-0
	194	土 器				Hue2.5Y 7/3 淡黄	粗砂混	良			32-79III RP1
	195	土 器				Hue5Y 8/3 淡黄	粗砂混	軟			35-79III RP23
	196	土 器				Hue5Y 5/6 明赤褐	粗砂混	軟			48-79III RP12
	197	土 器				Hue10Y 8/4 淡黄	粗砂混	良		丸形	64-64III RP4
	198	土 器				Hue5YR 8/3 淡黄	粗砂混	軟		丸形	52-79III RP3
32	199	土 器				Hue7.5YR 8/1 灰白	粗砂混	良			13-100III
	200	本 製 品	下 駄			(幅×機×厚) 219×90×15	下端四脚部欠損				31-100III RPW10

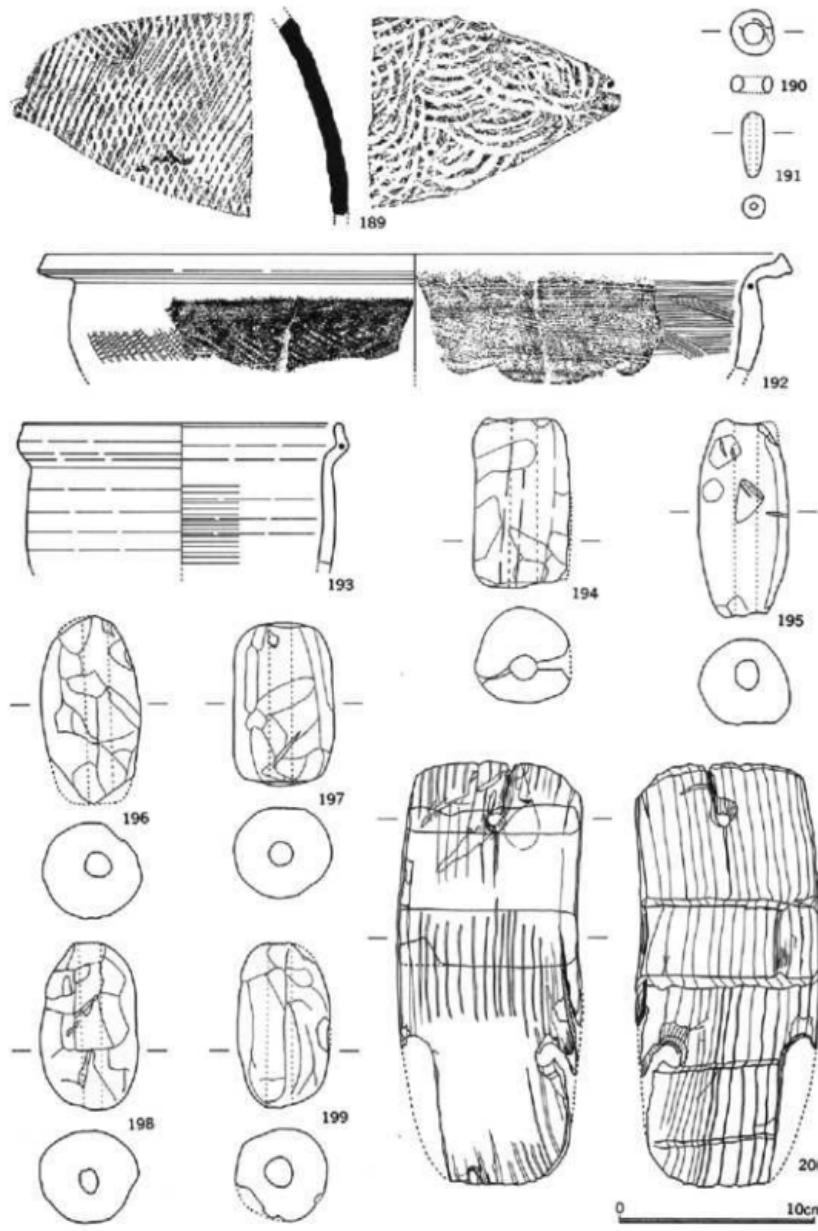




第29図 包含層出土土器 (2)



第30図 包含層出土土器 (3)



第31図 包含層出土土器・土製品・木製品

り離してある。174は内面に墨痕が広がっており、転用硯として使用されたものと考えられる。皿は3点出土であるが、垂直に立つ高台に、大きく外反する体部である。底部には「升」の墨書きがあり、176は、环身内面が転用硯として利用されている。环の体部や、底部には墨書きされたものが多く、第29図にまとめた。墨書きされた文字は「千」、「稻」、「廣」、「繩」などである。土器以外では、土錐(191・194~199)、土輪(190)、下駄(200)が出土した。土錐で長さ3.5cm、径1.1cmを測る小型の191を除いて他は長さ8.5~10.5cm、径4.5~5.5cmを測る大型の土錐である。丸木や、竹等に粘土を巻きつけ、形を作ったのちヘラや、指頭で整形を施している。以上包含層遺物を記述したが、文字を習字や個有を表したり、網を作り、本遺跡南方100mに西流する新井田川で漁を営む古代の生活をうかがい知る資料となつた。

V ま と め

遺構の変遷と時期

今次の調査によって検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、井戸跡3基、土壙12基、溝状遺構15条、旧河川跡1条の他、柱穴や性格不明の遺構が計213基確認され登録した。

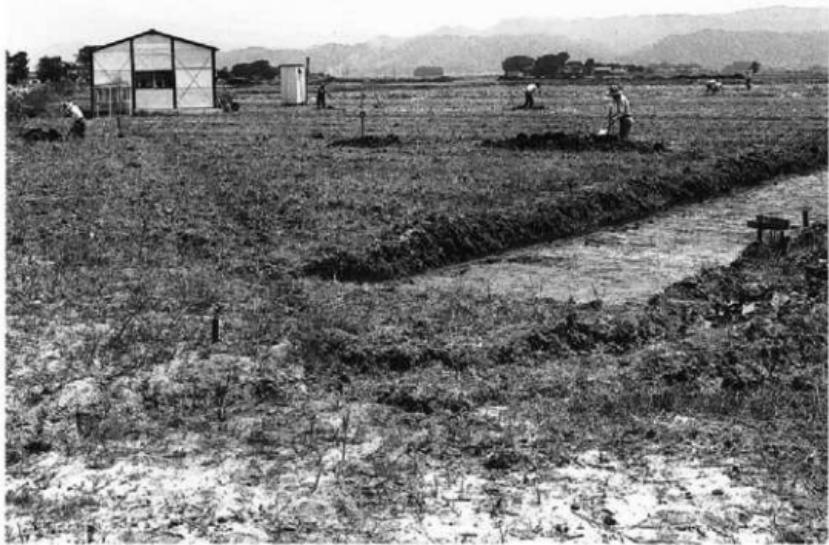
調査した地域はA~C区と計画排水路Lトレント拡張区を中心に進め、A区では、溝状遺構4条、旧河川1条他を検出した。B区では掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土壙3基、溝状遺構6条の他柱穴等を検出している。C区では掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、土壙11基他である。Lトレントでは溝状遺構が二条重複して検出されている。これら精査区内で確認された遺構の内容や規模もちがい、時期的な隔たりがあることを調査結果では得ている。本遺跡の検出遺構では、磁北に対してほぼ同じ方向を向くSB1建物跡と約23度西へ傾く建物跡(SB2)があり、SB1建物跡が存在するC区では、建物跡に付属すると考えられるSE101井戸跡、井戸跡周辺に存在するSK198・188土壙等が各遺構の出土遺物により10世紀後半に当たられる。またSB2建物跡は、建物跡規模の南部が未調査区域に入るが、SE64井戸跡、SK63・23・63土壙が付属する遺構に考えられ、その覆土からの出土遺物により11世紀前半と推測される。また多数の墨書き土器が出土した計画排水路Lトレントは、墨書き文字「稻」から推測して、収穫への祈願が行われ、廃棄されたものと考えることが出来る。昭和62年度には今年度調査区の西側を調査している。庄内地方平安時代の集落構成単位となる母屋1棟に付属建物跡1棟、井戸跡、土壙という集合単位が確認されている。今年度調査内容も昨年度と同様の時期が当たることが出来ることから、同一集落の構成単位と考えられ、2期の遺構群(註1)とそれ以後の時期と考えることが出来る。

註1 野尻 侃他 「南興野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第114集 1987

図 版



遺跡遠景（南東から）



遺跡近景（南西から）



調査風景（西から）



調査風景（東から）



遺跡の層序



昭和61年度第1次調査



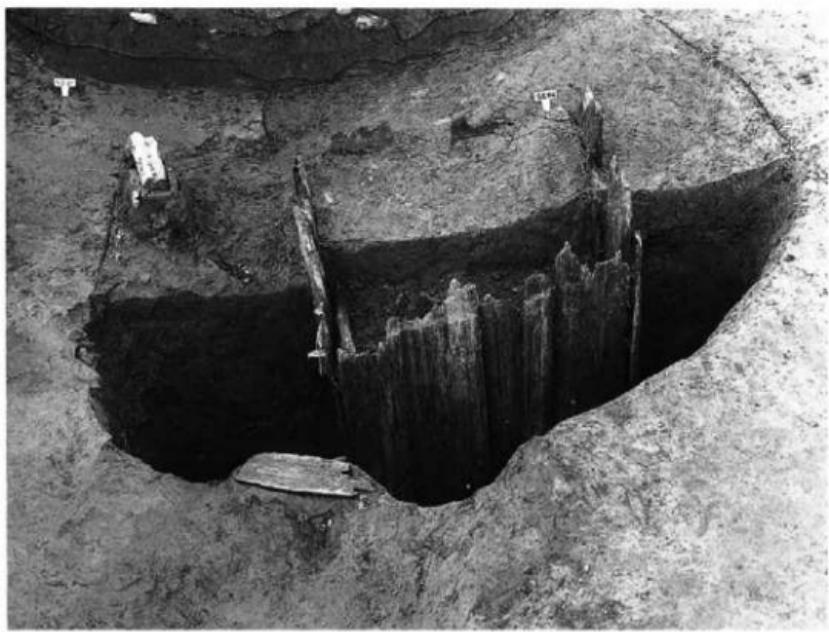
S B 1 建物検出状況



S B 2 建物跡検出状況



SE 64井戸跡検出状況



SE 64井戸跡掘り方半蔵状況



上部検出



井戸枠内



縦板



横組柱・蓋串



井戸枠内遺物出土状況

S E 64井戸跡



土層断面



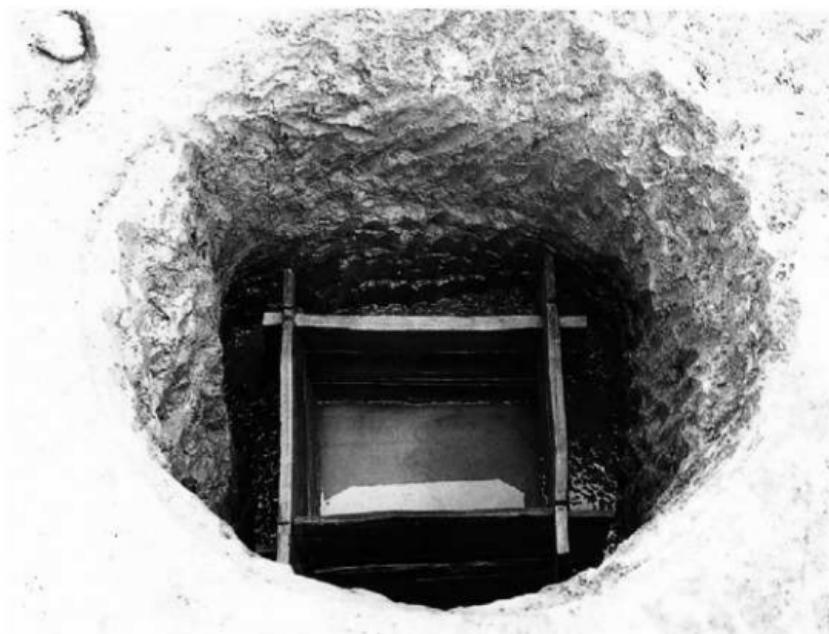
井桁検出状況



土層断面

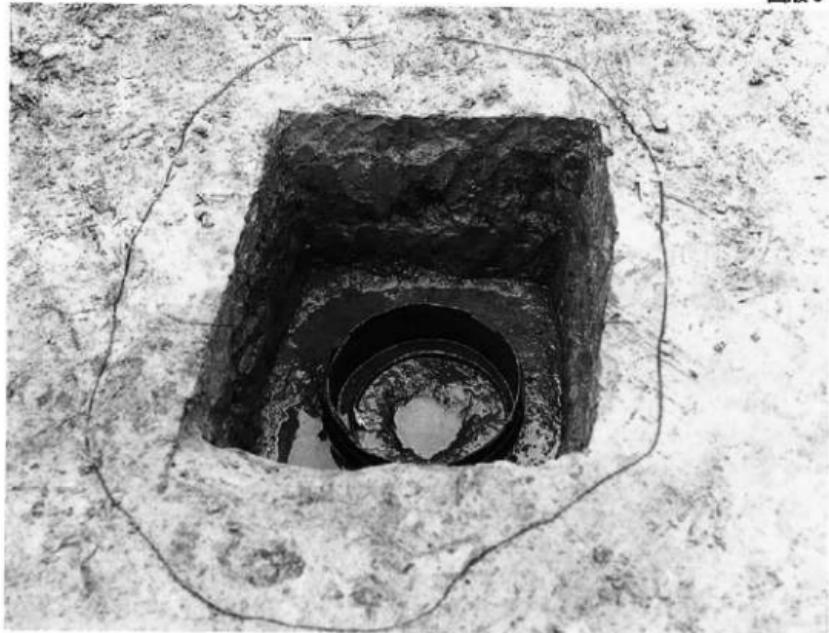


塙り方完備状況



井桁内完備状況

S E 101井戸跡



プラン検出状況



遺物出土状況



井戸眼検出状況



幅り方半截状況



井戸眼内完壊状況

S E 104井戸跡



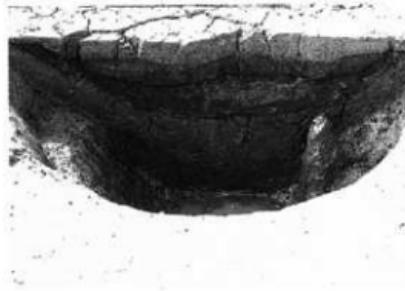
SK 23土壤遺物出土状況（南面）



SK 49土壤半截状況



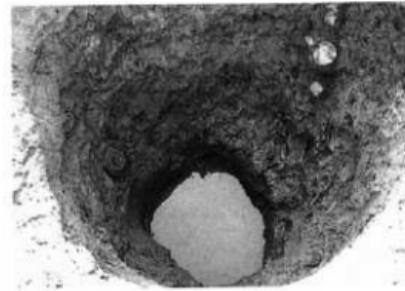
SK 23土壤遺物出土状況（北面）



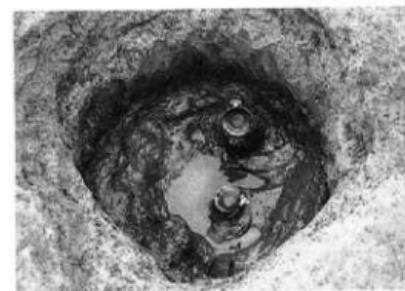
SK 49土壤土層断面



SK 23土壤土層断面



SK 49土壤遺物出土状況



SK 62土壤遺物出土状況



SK 100土壤プラン検出状況

S D55 (手前)・56 (奥) 清水道構





S D55溝状遺構



S D55 + 56溝状遺構接合部



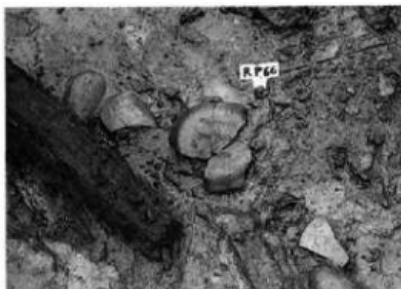
S D55 + 56溝状遺構接合部



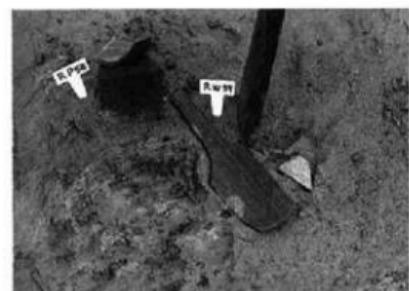
R P45漆紙付陶土器



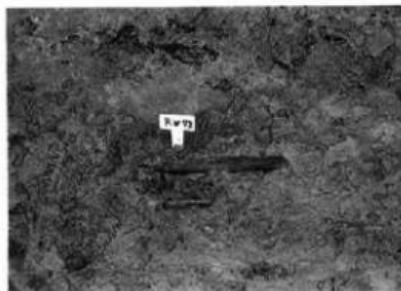
R P55漆土器



R P66漆土器



RW59しゃもじ



RW72漆半
遺物出土状況



S D21 潟状遺構



S D24 潟状遺構



S D41—42 潟状遺構



T. T. 128



S G 56旧河川断面状況（東から）



S G 56旧河川断面状況（西から）



S G 58旧河川跡自然木出土状況



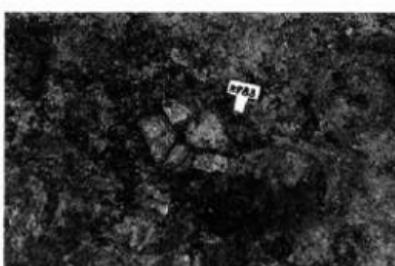
S G 58旧河川跡北半部完堀状況



S G 58旧河川跡土層断面



S G 58旧河川跡土層断面



R P 89内黒土器出土状況



R T 84瓦片出土状況





5



6



7



8



9



10



11



12



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



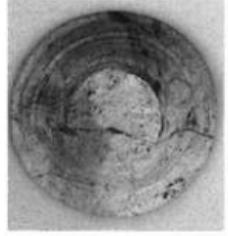
25



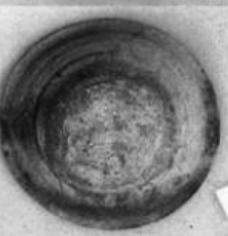
26



27



28



29



30



31



32



34



35



36



37



41



38



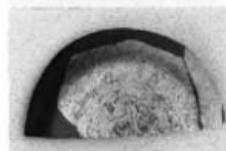
40



42



43



39



44



45



46



47



48

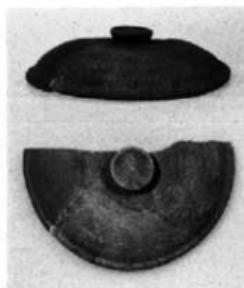


49

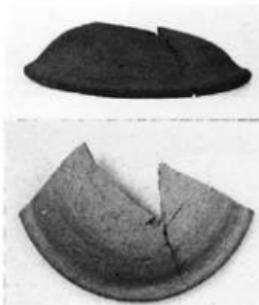


50





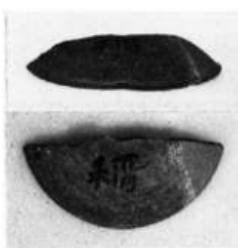
51



52



55



53



54



55

56



57



58



59



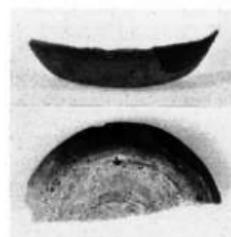
60



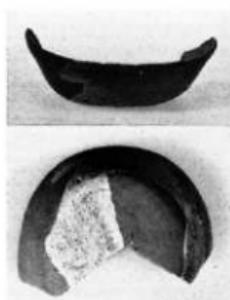
61



62



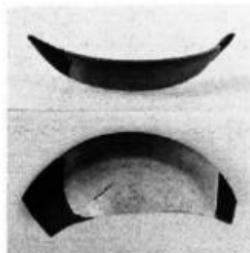
63



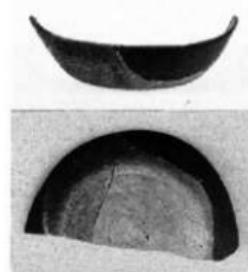
64



65



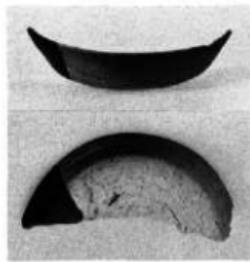
66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



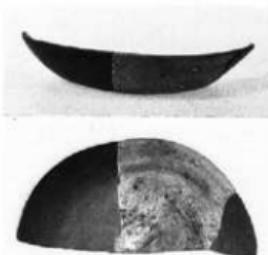
76



77



78



79



80



81



82

81



83



84



90



85



86



92



87



88



92



89



91



93



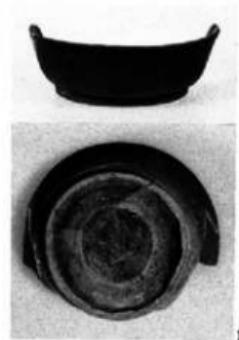
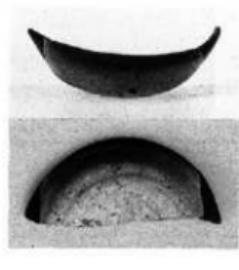
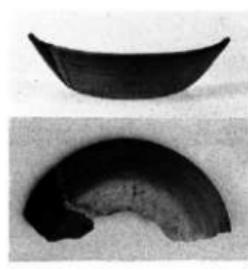
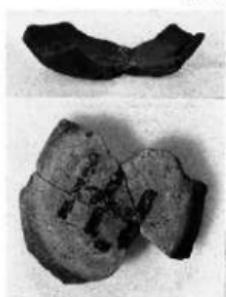
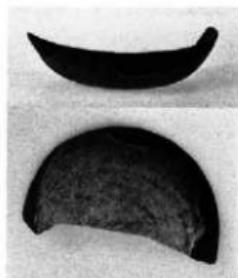
95



96



94



104





111

112



109



113



114



115



116



117



119



120



122



121



118



123



124



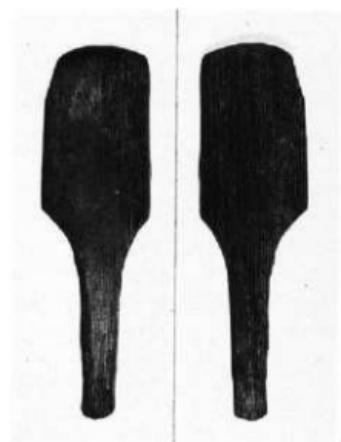
125



126



127

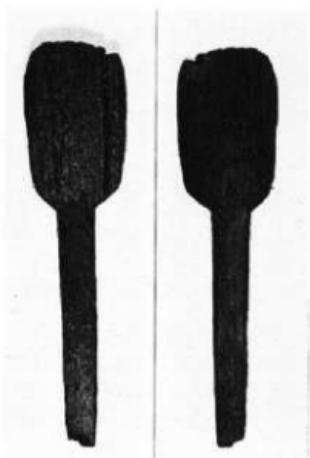


128

130



129



131



132



133



135



136



137



138



139



140



141



142





143



145



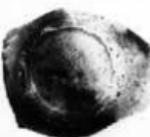
145



147



148



144

149



150



150



151



153



154



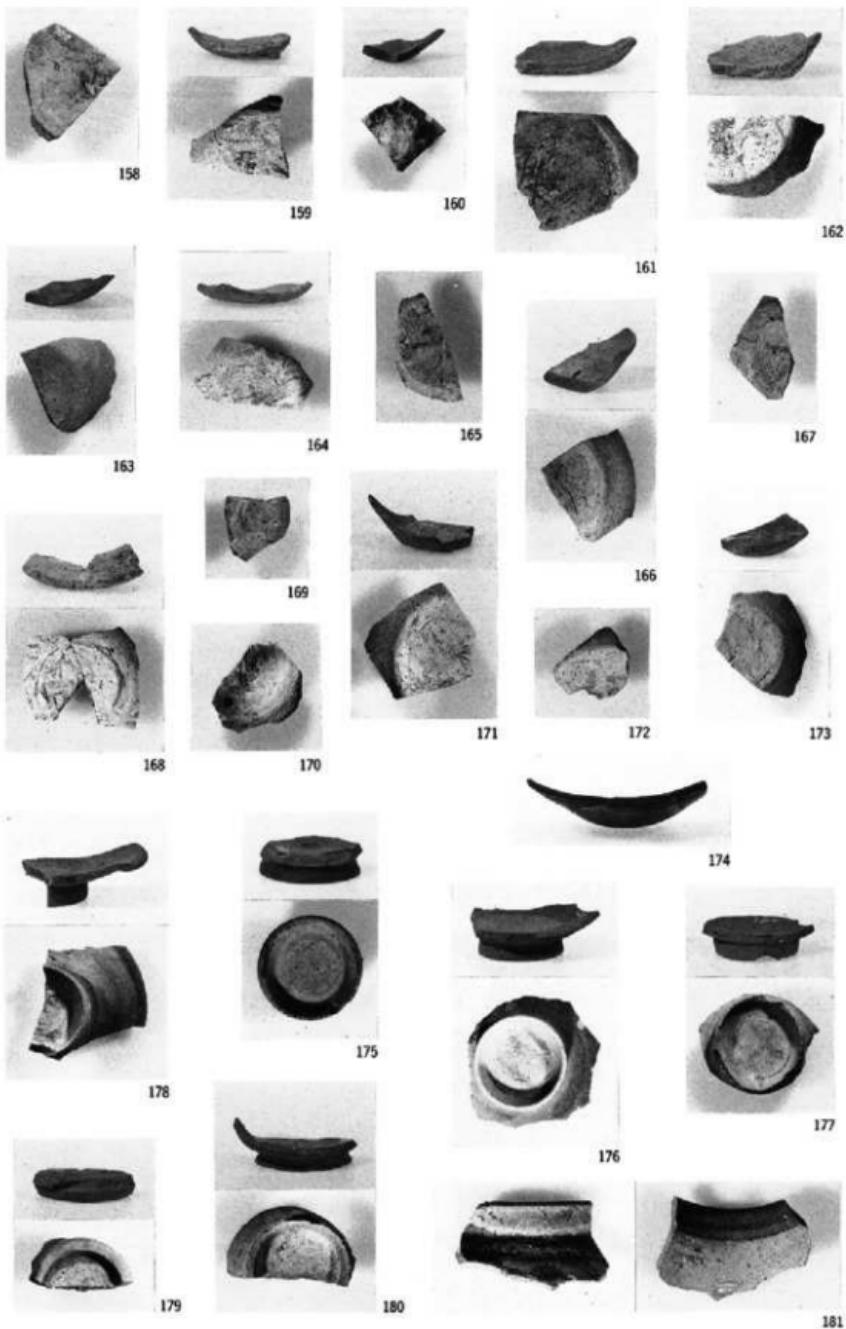
152

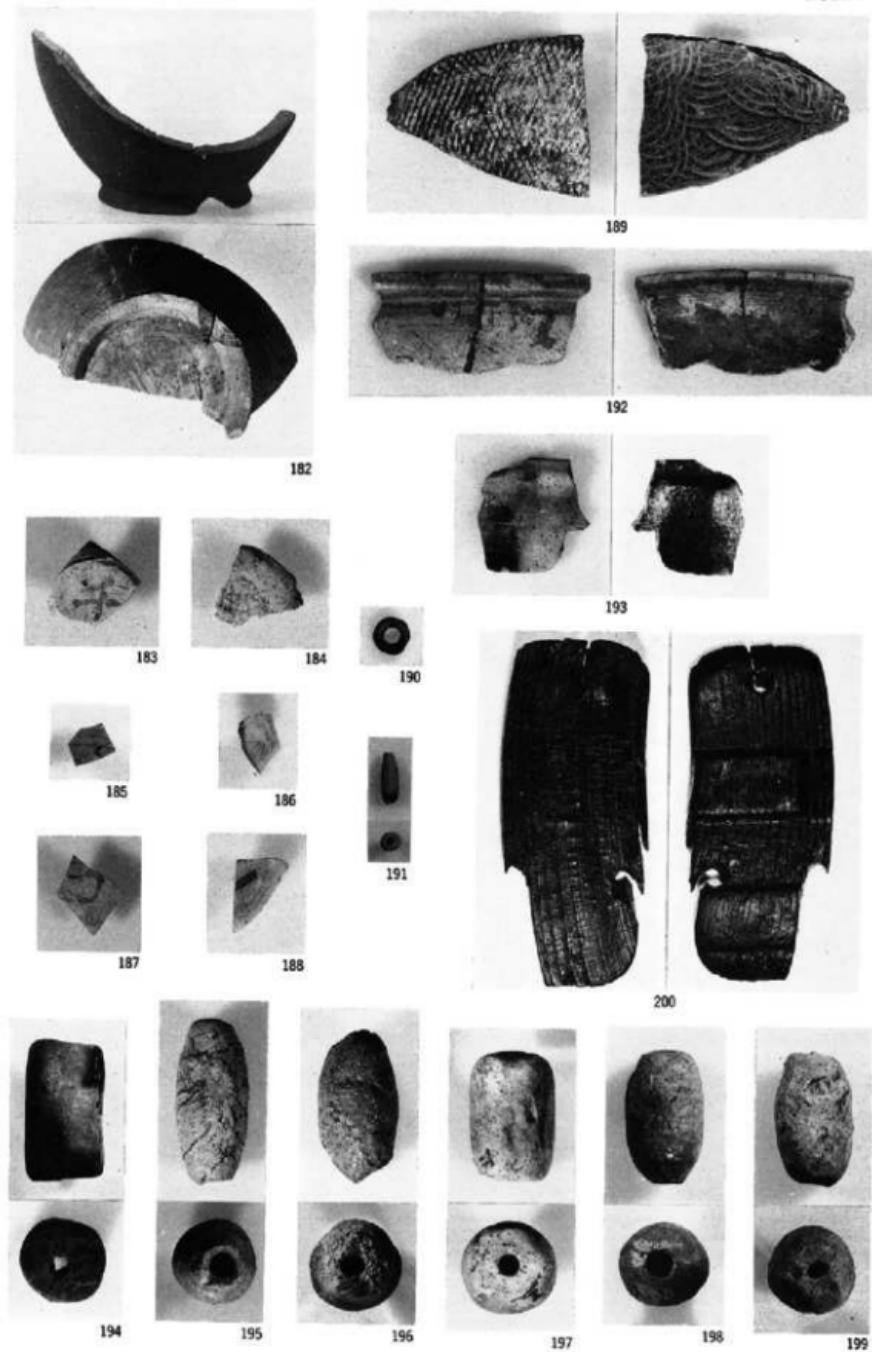


154



157





山形県埋蔵文化財調査報告第122集

南興野遺跡 第2次発掘調査報告書

昭和63年3月25日 印刷
昭和63年3月31日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会
印刷 大風印刷
